The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明治中期の回覧雑誌「共究会文章会」 : 附魚住折蘆・和辻哲郎遺文
Author(s)	岡島, 昭浩
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2014, 54, p. 1-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54058
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明治中期の回覧雑誌「共究会文章会」――附　魚住折蘆・和辻哲郎遺文――

岡島昭浩

一　はじめに
二　資料の概要
三　回覧雑誌と共究会の概略
四　各号の内容
五　魚住影雄の文章
六　和辻哲郎の文章
七　おわりに

一　はじめに

魚住折蘆は、石川啄木「時代閉塞の現状」で言及されたことで知られる他に、一高生・藤村操の自殺に関する発言でも知られる人物であり、また大正教養主義に連なる人物としても知られる。藤村操と折蘆は東京の私立京北中学校（東洋大学構内）で知り合ったのだが、

折蘆は上京する前に兵庫県立姫路中学校に通っており、そこで共究会という会に入っていたと言うことが分っている。

『折蘆遺稿』所載の「折蘆年譜」の明治二十九年には、四月の姫路中学入学に続いて、五月に、

共究会に入り、作文、討論、演説及び野球等に熱中する。

とあり、折蘆の「二十年のおもひで」（「自伝」とも。『折蘆書簡集』所収。以下「二十年」）には、

中学校に入つて二三ヶ月の後兄につれられて、有志の演説会に行つた。共究会と云つて演説や文章を稽古する会で中学生ばかりで出来てゐた。「向ふ行き」の強い僕は初めて出席して即席に演説した。何でも愛国的な慷慨的なことを云つたと覚えてゐる。（『書簡集』p.542）

と見える。また、

共究会の文章をあつめた回覧雑誌の外に、僕は兄と絵入の回覧雑誌を創めたことがあつた。とにかくこんな事はすきであつた。僕等に習つて又絵入の回覧雑誌を同級の者で創めるものがあつた。この雑誌に僕が投書した一文ははしなく一大紛議を醸す程になつた。（p.543）

とある。

姫路中学・一高・東京帝大哲学科の後輩であり、上京して折蘆を訪ねて以降、深い親交のあった和辻哲郎は、次のように書き残している。

数年前にここの中学で魚住影雄君が上級生の制裁を批判した文章を書いたのは、共究会という一つのサークルで作っていた回覧雑誌であったが、たといそういう文章は載っていないにしても、回覧雑誌に比べるとこんにゃく版刷りの雑誌の方が危険である。だからそういうものを作ること自体が生意気至極だというわけであったのであろう。（「自伝の試み」）

和辻哲郎のものには共究会の回覧雑誌が問題になったと書いているのに対し、「二十年」の記述はやや異っているが、ことを収めるのに共究会の先輩が与っているという記述がある。また、「二十年」には、

三十年の春のことである。兄は此年きりで退校した。そして兄の友人が大方僕の友人となつた。長沢天宅二君は其主なるものであつた。これは又共究会に入つてゐたせいで、会で上級生に接近する機会〈を〉得たのである。（p.543）

共究会は校中の文章家と雄弁家との集合であつた故に、僕の趣味の開発にも文章の技倆の練磨にも屈竟の所であつた。（p.543）

僕を圧迫せずしてかばふところの上級生を有してゐる共究会は、僕の反抗心を軽めるのに功があつた。（pp.548-549）

などの記述が見え、共究会が、魚住折蘆の人物形成につよく関わったことには違いない。

年譜の、明治三十三年九月十五日の項には「共究会の衰微」を脱稿したとあるが、これは『折蘆遺稿』『折蘆書簡集』等には収録されておらず、紹介されていないものと思われる。最初期の年譜である『折蘆遺稿』の年譜にある記事を、そのまま後の年譜も引き継いだのであろう。

助川徳是（1983）は、折蘆の兄正継の家に残された折蘆の遺稿などを調査している。中学生時代の日記により、共究会のメンバーに蓼水長沢一夫がいたことを記し、更に姫路中学校・姫路西高校の同窓会名簿とつき合わせて、姫路中学校の知人の一部を記しているが、共究会については詳しいことは報告されていない。

橋本政次（1964）でも、姫路中学校での文事について触れられるが、共究会についての言及はない（やはり姫路の文事に触れる『姫路市史』にも、共究会は見えない。）。『姫中・姫路西高百年史』の部活動の歴史などにも記述はない。

二　資料の概要

さて、手許にある冊子は、主に和紙に毛筆やペン書きなどの肉筆で書かれた上で、綴じられている（綴じた後に天地を切りそろえた場合もあるものと思われ、一部文字が切れた箇所もある）。表紙に『文章会』などと書かれていて、これが十冊ほどある。「第五回」から「第五十回」までの間の十冊で、『文章会』の他に、これも手書きの『日記　共究会』という冊子もある。

古書市（おそらく野外の四天王寺古書市）で入手したと記憶しているが、詳しい経緯は覚えていない。近代文章作成史の一資料と考えて購入したものだったと思う。恐らく、五冊千円というような安価で置かれていた中から、自分の関心に関連しそうなものを抜き出したものだったはずである。何時の購入なのか記録も記憶もない。購入したまま放置してあったのだが、買い物袋に入ったままの和装本を整理しようと偶々手に取ってみると、これが明治二十九年から三十七年頃までの姫路中学校共究会の回覧雑誌であることが分った。魚住折

蘆の文章も、和辻哲郎の文章もある。折蘆年譜にのみ見えていた「共究会の衰微」「青年文士の品性」の文章も見える。これらは、年譜にも見える「梔花」の名で書いているが、本名・魚住影雄名義の文章もある。

また、折蘆の兄、正継のものと思われる「魚住陽谷」の評語もあるし、会員外と注記があって和辻哲郎の兄、和辻竜太郎[1]の文章も載せられている。また、一高・東大で交流した折蘆と和辻哲郎などの共通の知人として知られる人たちの文章も見える。助川（1983）に名の見える長沢一夫、天宅敬吉、菊地金次郎、福間甲松、橋本（1964）に見える前田蘇白・菅野修蔵の文章もある。「高浜次郎」「高浜江の蘇」などとあるは、高浜二郎・高浜蘇江（高浜天我）であろう。和辻哲郎の友人、黒坂達三[2]（折蘆の友人である黒坂禎一[3]（同じく会員）の弟。芦田恵之助が、和辻哲郎と共に回想している人物でもある）の文章もある。画家となった新井完の短文もある。

なお、共究会は、姫路中学校の生徒の集まりであるに留まらず、そのＯＢも「乙種会員」として参加していた。[4]姫路中学を退学して上京した魚住影雄であるが、京北中学校・一高時代も、乙種会員として、『文章会』に投稿しているのである。

魚住影雄とはすれ違いだが、和辻哲郎が一年生の時に姫路中学校に赴任した若き国語教師、芦田恵之助の名も『共究会日記』に見えるし、『第四十四回文章会』に、その談話の記録もある（残念ながら、その作文指導の実際は、本誌からは伺うことはできないが）。また、ちょうどこの時期に姫路の地で『日本語典』を刊行した前波仲尾の名も見える。[5]

和辻哲郎の中学生の頃の文章は『初旅の記』（没後十二年経過した、昭和四十七年発行、新潮社）にも収められているが、魚住影雄の中学時代の文章は未発表であろうと思う。また、一高時代の文章は、『折蘆遺稿』『折蘆書簡集』や、一高の『校友会雑誌』（ＤＶＤ復刻あり）にも載せられているが、共究会乙種会員であった魚住影雄は、『文章会』に、ある程度纏まった文章を寄せているので、これは『折蘆遺稿』などを補う意味があろう。

和辻哲郎の回想に依れば、二人の初対面は、明治三九年の四月で、この時は和辻哲郎の兄の紹介状を携えていったということであるが、三七年九月の『文章会』第五十回には、二人の執筆が見える。しかも和辻哲郎は、魚住が参加した東京支部会について言及してもいるのである。

この回覧雑誌は、魚住折蘆や和辻哲郎の逸文を伝えるものとしてだけではなく、明治三十年頃の中学生・高校生・大学生の文章修行や、思考の記録としても貴重なものであろう。回覧雑誌ならではの、評語などの遣り取りも面白い。また、手書き資料ならではの文字遣いも

興味を引く。[6] これらは活字に拾われ（そこで正字にな）ることを意図せず、書いたままで人に見せることを意図している文字である。

このように興味深い共究会の『文章会』という回覧雑誌を紹介する次第である。

三　回覧雑誌と共究会の概略

明治の頃にしばしば回覧雑誌を作って読む行為が行われていたことは、ロバート・キャンベル（2004）に見えるが、坪内逍遙周辺の『延葛集』（『未刊・坪内逍遙資料集』）、尾崎紅葉周辺の『我楽多文庫』（初期）の他に、藤岡作太郎・西田幾多郎の第四高校に於ける我尊会[7]なども知られる。[8]

回覧雑誌は、我尊会文集のように、どこかの時点で、綴じがはずされて各執筆者のもとに返るという道もあり、そうなると誰かが記録を残していない限り、雑誌としての姿は分らなくなる。しかし、この共究会のものは、綴じをはずされることなく、そのままの姿で伝わったものである。

共究会の、ある時点までのことについては『共究会日記』（表紙に「日記」とあり、改行して「共究会」とあるが、『共究会日記』と呼ぶことにする）で伺える。

『共究会日記』も手書きであるが、そこには、B４判で活字印刷された「共究会規則」が挿入されている。一枚は貼り込み、もう二枚が挾みこまれていた。[9] 二枚の内一枚には規約改正を考えた鉛筆書き込みが見られる。以下には、印刷本文を示す。

共究會々則

第一章　綱領

第一條　本會ハ共究會ト名ヅク

第二條　本會ハ兵庫縣姫路中學校在學生及ビ嘗テ在學セシモノヲ以テ組織ス而シテ之レヲ分チテ甲種會員乙種會員ノ二種トス

第一項　甲種會員ハ現今在學生トス

第二項　乙種會員ハ校外者トス

第三條　本會ハ會員互ヒニ智德体育ヲ養成スルヲ以テ目的トス

第四條　本會事務所ヲ阪田町妙圓寺内ニ假設ス

第五條　本會々則ノ修正ハ総集會ノ決議ヲ經ルニ非レバ修正スルコトヲ得ズ

第二章　事業

第六條　本會ハ第三條ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ方法ヲ設ク

談話會　運動會　文章會

第一項　談話會ハ毎月二回之ヲ開ク

第二項　運動會ハ毎月二回之ヲ開ク

第三項　文章會ハ毎月一回之ヲ開ク

第七條　本會ハ毎期一回會報ヲ編緝ス

第八條　四九両月ニ於テ總集會ヲ開キ本會ニ關スル事件ヲ議シ役員改撰ヲ行フ

但シ七名以上ノ要求ニ依リ臨時總會ヲ開クコトアリ

第三章　役員

第九條　會務ヲ措辨スル爲メ左ノ役員ヲ置ク

會長　一名　副會長　一名　委員六名

第一項　會長ハ本會一切ノ事務ヲ總理ス

第二項　副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アリテ其事務ヲ取ル能ハサル際ハ之レヲ代理スルモノトス

第三項　委員ハ之ヲ談話運動（二名）文章會計雑務ノ五部ニ分チ各其部ニ關スル事項ヲ掌ルモノトス

第十條　各役員ハ甲種會員中ヨリ互撰スル
モノトス
第十一條　役員ハ決シテ其職務ヲ辞シ能ハザルモノトス若シ事故アリテ就職スルニ堪ヘザルトキハ其理由ヲ明記シ願書ヲ添ヘテ會長
ニ差出シ其許可ヲ受クヘシ
但シ會長ニ於テ承諾スヘカラスト認ムルトキハ之ヲ却下スルコトアルヘシ
第十二條　就職者辞職セハ直チニ補欠撰舉ヲ行フヘシ

第四章　會計則

第十三條　本會甲種會員ハ會費トシテ毎月十日迄ニ金三錢ヲ納ムルモノトス
第十四條　時機ニ依リ臨時會費ヲ募集スルコトアルヘシ

第五章　入退會

第十五條　入會セント欲スルモノハ會員一名以上ノ紹介ヲ以テ入會願書ヲ雑務部ニ差シ出シ其許諾ヲ受クヘシ
第十六條　本會ハ猥リニ退會ヲ許サス　若シ已ムヲ得スシテ退會セントスルモノハ願書及ヒ理由書ヲ雑務部ニ差出シ其許諾ヲ受クヘ
シ

第六章　罰則

第十七條　本會ノ名譽ニカヽル不良ノ行爲アルモノハ役員一同ノ協議ニ依リ除名スルモノトス

明治三十二年四月改正
共究會

この規約と同様に、『共究会日記』冒頭の「共究会過古(ママ)の歴史（概略(ママ)）」も、共究会の概略を知ることが出来る。

設立

体育の道はいとよく開けベースボール等を目的とせる会数ありけれども智徳を旨としたるはあらなきをなげかはしとて明治□□年の頃なりけり　渥美[10]、松尾[11]、菊地[12]の三氏はからひ一つの会をぞ立てたりける、これぞ共究会なり。六月の末つかた、菊地氏の宅にて第一総会を開き、規則を定め役員を撰み行く末の事ども議しぬ。高井正氏[13]、後閑宣太郎氏[14]、小山誠二氏[15]、米田累充氏[16]、菅埜修蔵氏[17]、神村健治氏[18]、橘辰三氏[19]、橘虎之助氏[20]をはじめ数十人の会員をたゞちに得たり。げに第一総会もこれらの人々の祝辞議論等ありて盛なりき。本会の目的たるや実に同志の交情をあたゝめ、かために利する所あらんが為めなり。これがため事業として談話、文学、運動の三つをなせり、しかはあれど前にも述べし如く運動熱に反流して生れし会なれば其精神は何処までも智的なりしなり精神的なりしなり

役員

高井正氏まづ会長となり後閑氏副会長となり給へり　これ第一総会の結果なりけり　爾來両氏専ら本会の為め尽力ありて基は定りぬ二年目の後中学校を出でましければ後任は会長に浦上氏[21]、副会長に菅野氏（後に渥美氏）と定り熱心につくされけり。浦上氏卒業の後、渥美氏・菊地氏は会長に、小泉氏[22]、吉田氏[23]は副会長に次ぎてならる

会計は久しく菅野氏・浦上氏（後に長沢氏[24]・中須氏[25]）なり給ひぬ。

雑務には渥美・齋藤[26]・小山・菊地・魚住正[27]・吉田・天宅[28]・砂川[29]・福間氏[30]等、相次で受任せらる

談話部委員には、米田・小山・渥美・井上[31]・菊地・魚住・天宅・武村氏[32]等相續きて事務をとらる

文章委員には齊藤・菊地・菅埜・吉田・長沢氏

運動部は齊藤・石塚[33]・小疇[34]・小泉・村上・平塚[35]・高橋諸氏

文章会

初めは文章練磨会の名のもとに会員の文章を集め清書して冊子にし名ある先生の添削を受くる方針なりき。

別の委員を程にもなければとて副会長後閑氏はこれを一手にひきうけたまひぬ。第一回第二回は一つに同氏の尽力にて出来上り其頃中学校作文国語習字の教師佐々木先生[36]添削をうけつ。かくて後専任委員を置く必要ありとて委員をまうけしも初めは発行のはこびに至らずして止みぬ。次ぎに菊地氏文章委員となり。いさゝか面目をあらため甲種乙種の二種となし甲種は従来の如く委員題をえらびて作らしめ時々先生の添削をあふぐ事とし、乙種は題随意文体随意自由のもとに会員の投書を集むることとなり爾後毎月一回編輯をなしぬ。　文章練磨会は其名せましとて文章会とあらため名実〈以下空白〉
佐々木先生・金峯先生（漢文作文教師[37]）本会のため添削の労をとりましぬ。

談話会

はじめは重に菊地氏の宅にてひらきぬ。其他、岩品[38]・橘・後閑・砂川氏の宅にても開きぬ。夜のみにかぎらず昼もひらきぬ。大方毎土曜に開けり。後に毎月二回とせり。
後、高井氏等の尽力により北條口至性社をかりぬ
後、妙円寺にうつりぬ
本会設立以来、中学校の幾何・英語の教師たりし遺沢（ママ）先生、[39]いつも来会ありて演説したまひぬ。大に本会のためには恩人なりげに談話会は本会の精神ともいふべきものなりしなり
討論会をしたり債問会も開けり

運動会

はじめ旅行して各所の旧跡をとひ、或は博物採集などなし、むしろ学術的にして精神を美良にするを以て目的とせしが、体育の必要あるにより、旅行の行、ベースボール、フートボール等をなすにいたれり。途中委員三名とせしに今は一名になれり
増田・網干・書写・名草、等に旅行せし事ありき

会報

会報には会員の作りし文章などあはせ納めしが、文章会の改革と共に自然に其必用なきにいたり本会に関する議事状態を記載するものとはなれり

発起人

松尾氏、都合により退会せり。一時は渥美氏、寄宿舎に入りてありき。菊地氏は〈以下空白〉

盛衰

盛衰はきわまりなし。或は八人程にて談話会をひらきし事もありけり。又盛なる時もありけり

政変

高井氏も浦上氏も其他に於ても別に変法は行はれざりき。たゞ細き規則等につき一つ二つ言はん。

一、乙種会員を設けし事

一、智徳体の三育を養ふを目的とす　あるは時世にしたがひあらためたるなり

一、委員の各名目は時々にかわりしが、其職分は大同小異なり

一、高井会長の頃、『会員と見做さず』といふ事あり。不熱心の者等に行へるなり

歴史終り

「歴史」の次に「日記」が続く。委員の選挙結果などもあるが、人の出入りなどについての部分を摘記する（以下、カタカナまじりの部分もあるが、平仮名まじりに改めて記す）

（M31）

九月十四日　総集会を開く　出席者二十一人

菊地・渥美・砂川・武村・真田・長沢・阿山[40]・小田[41]・入江[42]・平塚・高橋[43]・坂田[44]・安東[45]・魚住・蟹江[46]・本岡[47]・坂田明[48]・福間・吉川[49]の諸子

村上君[50]乙種に入られ、吉田君も見えず。入会者は安藤・入江・八木[51]の諸君なりと、以上報告をせれる

九月十七日　入江・八木君入会

九月十七日　談話会を開く。出席者十五名七時三十分開会。

九月十八日　運動会を開く

九月二十一日　黒坂政吉君[52]入会

九月二十日　文章会開会

九月中　小泉君、眼病なれば当分出席しがたき由申出され許可す

十月一日　会報発行

十月一日　談話会開く（本期第二回）六時二十分、十二名出席

細野君[53]、同志社に入り乙種に入らる。吉田君は岡山医学に入り、村上君退学され、同じく乙種に入らる

十月二日　運動会を開く

十月五日　水澤[54]・前田[55]・有井[56]、三君入会

十月六日　會計員を改撰す　魚住君当撰する

十月二十一日、太田輝次君[57]退会

十月二十四日、小田芳三郎[58]退会

十月二十四日、大西外一郎君入会

十月三十日、運動会を開く

十一月二日、吉田忠君[59]、亀田虎吉君[60]、西田信次君[61]入会

十一月六日、高見新太郎君[62]入会
十一月二十日　文章及び雑務委員改撰
十一月二十日　運動会を開く
○本学期第三回談話会　出18聴３　開六時五分
　傍聴者は一年級の大西君、長谷川松三郎君、神村君
◎十一月二十二日　談話会を開く　六時十分開　出二十五人　傍二人
十一月三十日　文章会を開く
第四回　十二月三日　談話会を開く　五時、出席員十人

（M32）
以下、第一期
◎明治卅二年一月十二日木曜日第一期総会
一月十九日　臨時総会　役員一同　其他七名聯合して要求したる故なり　七時開く　出席者十五人
一月十五日　会長渥美君辞職
一月十六日　小田芳三郎君入会
二月七日　高井粛夫君[63]入会
三月廿四日　今回、小泉・菅野・渥美の三氏卒業せられしに付、之が送別会あり。
四月廿三日、三十二年度第一期総会あり　七時開会　出席者　拾六名
四月廿五日　寺尾成美君入会
四月廿五日　須野孝君入会
四月廿五日　黒澤正司君入会

四月廿五日　深瀬順也君入会
四月廿八日　中澤真次君入会
四月廿八日　田口寿三郎君入会
四月廿八日　高橋正美君入会
四月廿九日　第一學期第一期談話会開かれぬ　午後六時十五分開会　出席者　凡十九名
四月三十日　〇時より校東運動場に於てベースボールあり
来会者二十名余　いとも面白く遊びたり　後Companyあり　一同散会せしは四時半頃なりき
五月三日　宮崎傳治君入会
五月十五日　炭谷清一郎君入会
五月十九日　岡田正信君入会
五月二十日当日は塩田地方へ一泊の旅行を成さんとて会員一同其日を待ちつるに天何んぞ意地悪き　朝来より陰晴定らず時々細雨霏々たりしかば遂に中止となりぬ
ます〳〵も口惜しかりき　依て午后六時より第一期第二回談話会開かれたり　出席者廿名余
五月廿二日　深瀬信夫君入会
五月廿八日　一日の豫定を以て八家に旅行をなす　会するもの十人余り　委細は運動部に付きて知らるべし
六月十日　第四周年祝賀會は開かれぬ。出席者三十名余
六月十七日　永指眞次郎君入会す
同日談話会あり　六時開会の筈なしりも来会者小数なり　爲め七時頃に開会したり　出席者十八名余り
六月二十四日当日は本期最終の談話会は開かれたり　勇辨才士多き當共究会、定めし目覚しき談話もありしならんも本人病気の爲め欠席して其消息を報じ難し　何れ談話部より報告あらん　諸君深くとがめ給いそ
九月十四日　第二期総集會を開く出席者壱六名

九月一日　第二期第一回談話会ありたり　午后六時開会
九月廿九日　文章会ありたり
十月五日　浅田政一郎君入会
十月十六日　第二回談話会あり　多くの辨士(ママ)ありて最面白し　開きしは六時頃閉ぢしは九時半なり
当日　大森三郎君入会さる
　　福田宗司君入会さる
廿七日　文章会を開く
〃　高濱次郎君(64)入会さる
十一月一日　今中芳松君病気の爲め本会を退かる。大に惜むべきなり
十一月廿二日
十一月廿五日　島田宏君(65)入会さる

明治三拾三参年以降
八月二十二日に乙種会員と甲種会員との親睦会を開きぬ。種々有益なる談話あり。其の後餘興として名指しなどして面白しく日を過し散会しぬ。来会者に乙種会員、後閑宜(ママ)太郎君・小嶋壽夫君・齊藤君・砂川隆雄君・菊池金次郎君・前田秀幸君・菅野脩三君等、甲種会員、高井粛夫・三俣君・新井完君・島田君・長沢君・丹羽定雄君等。
十一月二十三日に談話会ありけり。来会者十三名と足立・蘆田両先生あり。旅行談話が面白し。おかしく愉快にきこへた。
一月二月にも愉快なる談話会ありけり。
二月何日総会を開きて会則変更、役員改撰を行ふ。其の結果として会長宮崎傳治君、副会長島田君、談話部員三俣君、文章部員田口君、会計部員炭谷君となりぬ。餘興談話等ありたり。
三月に愉快なる談話会を開きたり

四月二十六日、三十五年第一学期の第一回談話会、開かれた。談話部員
遠藤先生・足立先生

（M36）
四月二十六日　吉田政雄君入会
長瀬俊夫君入会
田淵順之輔君入会
星長謹次君入会
柴柳新次君入会
富岡　君入会
小山達君入会
石田　君入会

五月三日　談話会を開く。多数の会員の出席あり。
五月十七日　談話会として討論会あり。
足立先生・蘆田先生等、原君の雄弁に驚かる
六月十七日　河合武市君入会せらる
六月二十日　八周年大祝賀会を挙行す
八月三日　在姫路共究会会員の親睦会的談話会開けり。列席氏悉く己れの名紹介し一つの談話をなせり。乙種会員諸氏の共究会への希望等あり。
種々と話しありて餘興に移れり。名指等あり。
菓子等食ひながらしゃべる、一寸面白かりき。十時半比閉会せり。出席者には乙種会員後閑宣太郎君、菊池金次君、高井粛夫君、平

塚望君にて

（罫紙の残りは多いが、以下空欄。）

上には引用しなかったが、談話会の度に会則について議論しているのが目につく。また、談話会というのは、題目を決めて議論したり、自由題で演説したりする会のようである。題目を決めて論じる際には、たとえば、「海と山と何れか人物を養成するに適せる」という議題で論じ、最後には決を採る、という流れである。

四　各号の内容

以下、現存各号の目次を掲げる。漢字カタカナ・漢字ひらがなの別、文語・言文一致などの区別は、岡島が附した。

第五回文章練磨会　明治廿九年七月

○甲種

四時　芙蓉生　漢字カタカナ　文語　2枚

四季の記　壽山　漢字ひらがな　文語　2枚

磨婆野男　1枚

吉田　1枚半

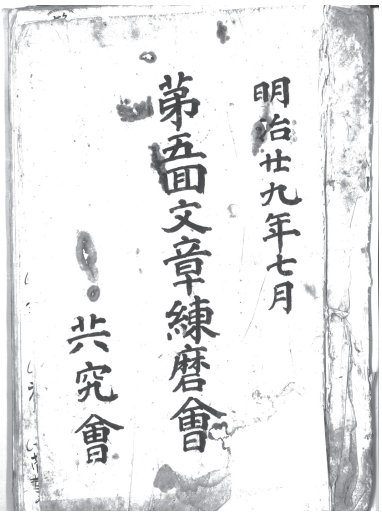
四季　極光（オロラ）先生閲　火美奈利（カミナリ）作　火の子散人補　漢字ひらがな　文語　半枚（3行）

文明人論　会員　夜半（やばん）の鐘生　漢字ひらがな　文語　1枚半

（おつしゅ）　まわり燈籠　咲蘭坊　風流奴　漢字ひらがな　文語　1枚

まわり燈籠　会員　しのぶやなぎ　漢字ひらがな　文語　2枚

まはり燈籠　しのぶやなぎプライム　漢字ひらがな　文語　1枚
○乙種
（おつしゅ）子供ごゝろ　漢字ひらがな　言文一致　2枚
夏螢　咲蘭坊
凧　咲蘭坊
英作文 A Filial widow, Taki Bunyen no Baika（文園の梅華）2枚
遠足　露の宿り葉　漢字カタカナ　言文一致　4枚
ノッペラ坊の鎮臺さん　香蘭　馥郁生　漢字ひらがな　言文一致　1枚
（おつしゅ）禹舞胴（上）咲蘭坊に於て　太郎作　漢字ひらがな　言文一致　2枚
青筋　会員　人身生理学士　漢字ひらがな　文語　半枚
水中ゴム球　会員　駒留俟士（コマルネイシ）　漢字ひらがな　文語　3行
電気燈　会員　捨徳彗佛（ステトクケイホットケ）　漢字ひらがな　文語　3行
茅屋の両墓　○山人　漢字ひらがな　文語　2枚
花園　植木屋　漢字カタカナ　文語　1枚
かへさの雨　会員　しのぶやなぎセカンド　漢字ひらがな　詩　1枚
塩田村温泉に到る　文園の梅華　漢字ひらがな　文語　3枚



第十五回文章会　明治三十年七月
目前之景　寒陽生　漢字カタカナ　文語　半丁
目前の景　氷雪　漢字ひらがな　文語　1枚
目前の景　甲種会員のなにがし　漢字ひらがな　文語　1枚

目前の景　蓼水　漢字ひらがな　文語　半丁
目前の景　牛田純一　漢字ひらがな　文語　1枚
目前の景　霞城[66]　共究会甲種会員　漢字ひらがな　文語　1枚
目前の景　草刈った野郎　漢字ひらがな　文語　1枚
写真（根なし草）　咲蘭坊　桂崖生　漢字ひらがな　言文一致　2枚
写真　花生　漢字ひらがな　文語　1枚
写真　霭霭　漢字ひらがな　文語　1枚
写真　凉月生　明治三十年六月廿五日作之　漢字ひらがな　文語　1枚半
写真　深感生　漢字ひらがな　言文一致　1枚
写真　長命居士　漢字ひらがな　文語　1枚
写真　龍虎生　漢字ひらがな　文語　半枚
〃　火之子散人[67]　漢字カタカナ　言文一致　3枚
〃　感慨胸ニ逼太郎　漢字ひらがな　言文一致　1枚

乙種之部　共究会
一、胡蝶（新体詩）　柳剛哲史[68]　漢字ひらがな　文語　4枚
二、蛙（新体詩）　月之舎香雲　漢字ひらがな　文語　1枚
三、此上もなき愉快なこと　風袋堂　漢字ひらがな　文語　1枚
四、蒸汽船の説　革帯生　漢字カタカナ　文語　2枚半
五、退任意見（漢文）　運動委員　漢字　1枚
六、共究会第二週年祝賀会の記　蛙厓生　漢字ひらがな　文語　2枚

七、緑陰読書の記　日本心　漢字カタカナ　（宣命書き風）　文語　1枚
八、蛍　夏月　漢字ひらがな　文語　半枚
九、母蛍（新体詩）乙種会員　柳剛哲史　漢字ひらがな　文語　1枚
十、ある夜　愛蛍子　漢字ひらがな　文語（和文調）　1枚
十一、諫辭　霞城　漢字ひらがな　文語　1枚
十二、日本魂と日本刀　漢字ひらがな　文語　1枚
十三、我身をかへりみて感あり　漢字ひらがな　文語　1枚
十四、暗夜の花　幼稚園保母　漢字ひらがな　言文一致　1枚
十五、北条口中之丁小誌　残んの月　漢字ひらがな　文語　1枚
十六、天下一の大慾張り者　夏の扇　漢字ひらがな　言文一致　1枚
十七、日本魂　Y　漢字ひらがな　文語　1枚
十八、園なる山吹のいとゝあわれなるに心あひたる人に送るふみ　挂崖生　漢字ひらがな　文語　1枚
十九、悪習の傳染を避くる論　殘月萩露　漢字ひらがな　文語　半枚
二十、無益に時日を費すべからず　漢字ひらがな　文語　半枚
二十一、月や雑草の十三　しづけき一夜　静江　漢字ひらがな　文語　半枚
二十二、蒸濕船　漢字ひらがな　文語　1枚
二十三、ゆふ霞の雫　柳剛哲史　漢字ひらがな　文語　3枚
二十四、考物　稲花散人　漢字カタカナ　文語　半枚
二十五、蹴鞠の遊び　蓼水　漢字ひらがな　文語　1枚
二十六、當時の景況　漢字ひらがな　文語　1枚
二十七、大氷塊　咲蘭坊挂崖生譯述　漢字ひらがな　詩　3枚半

第十六回文章会　明治三十年九月十五日

（本回には、教師によるものであろうと思われる朱による傍点・添削がある。）

甲種課題　旅行の記　十五篇

（一）　旅行之記（明治二十九年四年級大和旅行ノ一節）文園之梅華　漢字カタカナ　文語　3枚

（二）　旅行の記の一片　篠山より有馬温泉　乳具作　漢字ひらがな　文語　3枚

（三）　紅葉日記（一節）漢字ひらがな　文語　5枚

（四）　漢字ひらがな　文語　4枚

（五）　旅行の記　韋帯生　漢字ひらがな　文語　7枚

（六）　某城山に遊ぶ記　漢字ひらがな　文語　3枚

（七）　旅行一節　漢字ひらがな　文語　4枚

（八）　丹上山と遊ぶ日記　漢字ひらがな　文語　1枚

（九）　帰省旅行記　漢字ひらがな　文語　3枚

（十）　旅行の記　漢字ひらがな　文語　1枚

（十一）　旅行の記　漢字ひらがな　文語　3枚

（十二）　旅行の記　笠蓑山人　漢字ひらがな　文語　3枚

（十三）　鼓の滝を観る記　漢字カタカナ（俳句は漢字ひらがな）文語　2枚

（十四）　旅衣（抜）漢字ひらがな　文語　6枚

（十五）　一夕静軒子を中野の里に訪ふ　みかつき生　漢字ひらがな　文語　6枚

第十七回文章会　明治三十年十月

歌学會第一回披露　会長香雲　幹事柳剛　編纂　漢字ひらがな　文語　5枚

野辺の櫻　桂崖生　漢字ひらがな　文語　春花庵にありて櫻山雪雄しるす　3枚
隨意漫録　一寸生　漢字ひらがな　文語　3枚
第十六回文章会乙種小内閣ノ治安ヲ謀ルベシト云フヲ読ミテ所感ヲ書ス　革帯生　漢字カタカナ　文語　2枚
酒ハ百毒ノ長ニアラズ寧ロ百薬ノ長ナリト云フヲ読ミテ所感ヲ書ス　革帯生　漢字カタカナ　文語　2枚
筆のゆくまゝ　香露散史　漢字ひらがな　文語　2枚
名誉　革帯生　漢字カタカナ　文語　3枚
過ちを少なくせんことを論ず　文園の梅華　漢字ひらがな　文語　1枚
孟子ノ論ヲ駁ス　革帯生　漢字カタカナ　文語　2枚
志気論　鷺東の人　漢字ひらがな　文語　1枚
海軍ノ發達ヲ計ルベシ　真面目生　漢字カタカナ　文語　1枚
快楽　革帯生　漢字カタカナ　文語　2枚
摂津國ハ播磨国ニ勝ル　革帯生　漢字カタカナ　文語　1枚
日誌中の一節　三日月生　漢字ひらがな　文語　2枚
秋の雨　桂崖生作　小学生秋野雨之助筆記　漢字ひらがな　文語　2枚
秋の暮　二葉男史　漢字ひらがな　文語　1枚
櫻の国家　火の子散人　漢字ひらがな　文語　2枚
秋のけしき　文園の梅華　漢字ひらがな　文語　1枚
秋涼読書に可なり　下手姓　漢字ひらがな　文語　1枚
秋夜燈下読書の記　日本の少年　漢字ひらがな　文語　1枚
燈下稍親むべし　無名氏　漢字カタカナ　文語　1枚
秋のけしき　漢字ひらがな　文語　1枚

秋景を記す　漢字ひらがな　文語　1枚
秋山採茸　秋日旧家　山村秋晩　漢文　1枚
秋夜燈　桂崖生　風流奴補　咲蘭坊閲　漢字ひらがな　文語　1枚
秋の悲しみ　小倉　漢字ひらがな　文語　2枚
The Prospect of Suma K A　英語＋漢字カタカナ　文語　2枚
須磨の浦辺　桂香　漢字ひらがな　文語　1枚
思フマゝ　梅雪　漢字カタカナ　文語　1枚
汽車　白露城南位　漢字カタカナ　文語　1枚
曽て某山に遊ぶ記　漢字ひらがな　文語　3枚
帰校記　蓼水　漢字ひらがな　文語　3枚
法華山に遊ぶ記　節莽主人　漢字ひらがな　文語　2枚
七草の瀧旅行の記　桂崖生　漢字ひらがな　文語　3枚　咲蘭坊の付記あり
或日の事をしるす　下手姓　漢字ひらがな　文語　2枚
旅行一節　蓼水　漢字ひらがな　文語　2枚
櫻山雑筆其一　櫻花　漢字ひらがな　文語　1枚
櫻山雑筆其二　櫻花　漢字ひらがな　文語　2枚
櫻山雑筆其三　櫻花　漢字ひらがな　文語　1枚
櫻山雑筆其四　櫻花　漢字ひらがな　文語　1枚
櫻山雑筆其五　櫻花　漢字ひらがな　文語　1枚
緑蔭清風（のこり）　柳剛哲史　漢字ひらがな　文語　4枚
松籟颯々　三日月生　漢字ひらがな　文語　3枚

枯葦流水　香雲　漢字ひらがな　文語　4枚
西風傳韻　乙種会員　柳剛　漢字ひらがな　文語　4枚

第二十三回文章会　明治三十一年四月三十日

一言　記者先生　漢字カタカナ　言文一致　6枚
○甲種
墓場を弔ふ記　一寒生　漢字ひらがな　文語　1枚
墓場を弔ふの記　小倉　漢字ひらがな　文語　2枚
墓場を弔ふ記　五六月　漢字ひらがな　文語　2枚
墓場を弔ふ記　笹月　またの名　三日月　漢字ひらがな　文語　2枚
新聞賣子　蓼水　漢字カタカナ　文語　1枚
新聞賣子　笹月　またの名　三日月生　漢字ひらがな　文語　2枚
○光風明月
読書餘祿　笹月　（三日月）　漢字ひらがな　文語　6枚
狂怒餘言　蓼水　漢字ひらがな　文語　2枚
まにあはせに一つ二つ　乳臭　漢字ひらがな　文語　3枚
本会内閣　（会員必讀）　永府鶴秀　漢字カタカナ　文語　2枚
○松琴虫聲　詩欄
若草　蓼水　漢字ひらがな　新体詩　2枚
月　蓼江吟客　漢字ひらがな　新体詩　2枚
人定　三日月生　漢字ひらがな　新体詩　1枚

天津園　蓼水　漢字ひらがな　新体詩　2枚
春日江村　入大和　南都雑吟　大佛堂　秋月　漢詩　1枚
老の夢　蓼水　漢字ひらがな　新体詩　2枚
飛花三片　蓼水　漢詩　1枚
空閨怨　みかづき生　漢字ひらがな　新体詩　2枚
　さいたつま
春の野辺　蓼水　漢字ひらがな　文語　2枚
出多利引込駄利　記者　泥血前居士　記者　堂瀬駄芽駄生　同　黄美等太目駄生　漢字カタカナ　文語　2枚
春の野山　無名氏某　漢字ひらがな　文語　2枚
卒業生を送る詞　みかづき　又の名　柳月　漢字ひらがな　文語　3枚
臥床寸筆　蓼水　漢字ひらがな　文語　2枚
風流武者　桂崖　漢字ひらがな　文語　言文一致あり　4枚
桜を観る記　無名氏　漢字ひらがな　文語　1枚
天野が原　蓼江吟客　漢字ひらがな　文語　2枚

第三十一回　明治三十二年五月

第参拾一回文章会の巻頭に　共究会文章委員　前田秀幸　（印）　漢字ひらがな（楷書）　2枚
　光風霽月(69)
都會、田舎、生年ニ於ける得失　頭法羅之親方　漢字カタカナ　3枚
内地雑居　小倉　漢字ひらがな　1枚
我学生の腐敗　（青年を訂正）　〇〇生　墨消　漢字カタカナ　2枚

なぐりがき　仙郷澗客巧雪　漢字ひらがな　3枚
卒業生に送る　蒼陰　漢字カタカナ　1枚
隨感漫録　小倉　漢字ひらがな　2枚

自身免許　（三）　黒河鯉城　漢字ひらがな（一丁ほど漢字カタカナ）　10枚
思ふにまかせて　香雲　漢字ひらがな　1枚

柳暗花明

無銭旅行日記　幽芳　漢字カタカナ　3枚
校より帰る道すがらの記　碧潭　漢字ひらがな　4枚
銃猟日記　火の子散人　漢字カタカナ　2枚
花に嵐　蒼陰　漢字カタカナ　1枚
老車夫　山茸蛇堂　漢字ひらがな　3枚
三人男　天下太郎作　吹露校閲　漢字ひらがな　会話　2枚
白露城上月は清し　火の子散人　漢字カタカナ　言文一致　2枚
ふた株　はま千鳥　漢字ひらがな　一部言文一致（た・ます）　2枚

青山白水

書感　驟雨　愛泉　漢文　1枚
根なし桂　た、あ子　漢字ひらがな　俳句集　1枚
花もどり　もちや　（何かを墨消し）　漢字ひらがな　新体詩　3枚
無常のかぜ　蒼陰　漢字ひらがな　新体詩　2枚

枕時計　春廼屋根無留主人　漢字ひらがな　新体詩　1枚
若葉　た、あ、子　漢字ひらがな　新体詩　7枚
青葉若葉　蓼水　漢字ひらがな　新体詩　3枚
春の曙　香雲　漢字ひらがな（振り仮名カタカナ）　新体詩　3枚
つみくさ　B.Clunniey　漢字ひらがな（崩し）　新体詩　2枚
飛花落葉
ゐぬころ日記　天つありあけ（目次には蓼水）　漢字ひらがな　12枚
修学の現況を郷里の親に報ずる文　蒼陰　漢字ひらがな　候体　2枚
照れ日記　甲種会員　火乃子散人　漢字カタカナ　言文一致　1枚
三人の怠惰骨　蒼陰　漢字カタカナ　翻訳　1枚
紳士の叡智　蒼陰　漢字ひらがな　翻訳　1枚
松方大蔵大臣（法学士を抹消）　神原潔記　漢字ひらがな　2枚

第四十回文章会　明治三十三年十月
談話委員を辞する辞　魚住影雄　漢字ひらがな　文語　2枚
小説／目白の鐘聲　乙種会員・後閑柳剛　漢字ひらがな　言文一致
御無沙汰は　東京たより　乙種会員・渥美育郎　漢字ひらがな　文語　3枚
何が何でも　菅野香蘭　漢字ひらがな　文語　1枚
思ひ出し草　香蘭　漢字ひらがな　言文一致　5枚
蓼水草　長澤蓼水　漢字ひらがな　文語　9枚
残春芳　長澤蓼水　漢字ひらがな　文語　6枚

小説／二葉育雄　柳剛哲士　漢字ひらがな　言文一致　5枚
小説／二つ巴　恋奴（長澤蓼水）　漢字ひらがな　文語　5枚
旅　桂崖　漢字ひらがな　文語　2枚
鷺城のかたみ　蓼水　蘇江　香雲　漢字ひらがな　新体詩　11枚
さゝれ石　桂崖　漢字ひらがな　俳句など　1枚
その歌　桂崖　漢字ひらがな　文語　2枚
青葉の蔭　桂崖　漢字ひらがな　短歌　2枚
ゆく水　ふみ男　漢字ひらがな　言文一致　15枚
うつり香　ふみを　漢字ひらがな　言文一致　13枚
杜鵑一声　ふみ　漢字ひらがな　言文一致　5枚
寄宿舎生活二十四時　火乃子散人　漢字ひらがな　言文一致　7枚
餘興（魚住「不熱心辯」あり）　漢字ひらがな　文語　4枚
共究会の衰微　梔花生　漢字ひらがな　文語　8枚
檄　狂海生　漢字ひらがな　文語　6枚
冬青放語　蘇冬青　漢字ひらがな　言文一致　8枚
科学の研究　梔花　漢字ひらがな　文語　2枚
朗読法　秋風郎　漢字ひらがな　言文一致　3枚
青年文士の品性　梔花生　漢字ひらがな　文語　5枚
雁来紅　倭ふみ子　漢字ひらがな　文語　6枚
書寫山弔ひ　田口秀嶺　漢字ひらがな　文語　4枚
爭ひは避くべからず　梔花生　漢字ひらがな　言文一致　12枚

意馬心猿録　文雄　漢字ひらがな　文語　3枚
暑中休暇　梔花生　漢字ひらがな　文語　1枚
露草集　皎葉園　漢字ひらがな　短歌　2枚
閑雨村集　あや子　漢字ひらがな　短歌　3枚
狐馬集　肺苦生　漢字ひらがな　俳句　1枚

第四十三回文章会　明治三十四年十月十一日

露時雨
文章会に付て　文章委員　田口寿三郎　漢字ひらがな　文語　1枚
檄文（写）　東京支部連名　漢字ひらがな　文語　3枚
片舟沿海を渉るの檄　炭谷芳嶺　漢字ひらがな　文語　2枚
闇夜　梔花生　漢字ひらがな　文語　5枚
主義の声　梔花　漢字ひらがな　文語　2枚
少年の快楽　丹羽定雄　漢字ひらがな　文語　1枚
現今の仏教界　芳嶺　漢字ひらがな　文語　1枚
あゝ談話　宮崎生　漢字ひらがな　文語　4枚
試験点数の奴隷　好美天　漢字ひらがな　文語　4枚
人生の目的　炭谷芳水　漢字ひらがな　文語　3枚
萬拾集　宮崎美水　漢字ひらがな　文語（一部漢字カタカナ言文一致）　3枚
檄　六陰・美水　漢字ひらがな　文語　1枚
星月夜

夏期旅行の一節　巌苔　漢字カタカナ　文語　2枚
遊耶馬溪記
富士登山記　長谷川正夫　漢字カタカナ　言文一致　3枚
旅之空　すみれ生　漢字ひらがな　文語　7枚　香夢散人寫之
秋海棠
思ひ出されの記　菅野香蘭　漢字ひらがな　言文一致　8枚
あはれ故郷　湘雨　漢字ひらがな　文語　3枚
思ひ出の記　菊池金次郎　漢字ひらがな　新体詩＋文　4枚
夜行軍
秋来る
柚味噌
神の子　皎葉　漢字ひらがな　言文一致　5枚
蝦夷菊　湘雨　漢字ひらがな　文語　2枚
露骨集　魚住梔花　漢字ひらがな　言文一致　5枚
かゝる心が起った
忠告
手あたり次第
桑摘み　皎葉　漢字ひらがな　言文一致　5枚
その日文学　梔花　漢字ひらがな　文語　21枚
案山子
無題　東京支部　漢字ひらがな　4枚

小疇　中須　正井敬治　渥美　菅野　菊池　武村　魚住

走りがき　渥美育郎　漢字ひらがな　候文　3枚

御願　炭谷六陰・宮崎美水　漢字ひらがな　1枚

第四十四回文章会　明治三十五年一月廿日

文章部報告　文章委員　田口八重桜　漢字ひらがな　言文一致　2枚

山紫水明

談話部記事報告　談話委員　宮崎故村　漢字ひらがな　言文一致　26枚

入会の辞　副会長　大西汀月漁郎　漢字ひらがな　文語　1枚

光風霽月

目白取　長谷川MH生　漢字ひらがな　表音棒引き　言文一致　3枚

通天の紅葉　島田巖苔生　漢字ひらがな　言文一致　1枚

飛花落葉

月の栞　田口みすゞのや　漢字ひらがな　会話体から単語列挙へ　1枚

寄宿舎の一日　大西汀月漁郎　漢字ひらがな　言文一致　6枚

可憐の少年　炭谷六亜散人　漢字ひらがな　文語　3枚

節倹　伊藤寅一　漢字ひらがな　言文一致　1枚

笑ふといふ事に付ての余の感念　宮崎故村　漢字ひらがな　言文一致　6枚

百人一首和歌の解　田口八重桜　漢字ひらがな　言文一致　1枚

文覺　伊藤XN生　漢字ひらがな　文語　1枚

旅行についての感念　宮崎故村　漢字ひらがな　言文一致　3枚

外国語必用論　島田巖苔　漢字ひらがな　言文一致　2枚
かるた問答　田口八重桜　漢字ひらがな　言文一致　2枚
二兎を追ふ者は必ず一兎を得ず　丹羽定雄　漢字ひらがな　文語　2枚
修養　宮崎故村　漢字ひらがな　文語　1枚
明治三十三年正月拾一日談話会雑感　田口八重桜　漢字ひらがな　言文一致　2枚
あわれな孤子　宮崎故村　漢字ひらがな　言文一致　9枚
歌かるた　田口八重桜　漢字ひらがな　言文一致　2枚

鶯歌燕舞

落葉集　田口八重桜　漢字ひらがな　短歌　1枚
今世古今集（其一）　田口八重桜　漢字ひらがな　短歌　2枚
枯松葉　大西汀月漁郎　漢字ひらがな　俳句　1枚
今世古今集（其二）　田口八重さくら　漢字ひらがな　短歌　1枚
和歌　田口八重桜　漢字ひらがな　短歌　1枚
としの暮　田口八重桜　漢字ひらがな　新体詩　6行
題知らず　田口八重桜　漢字ひらがな　短歌　5行

錦心繡腸

小説／迷ひ子　咬菜庵鈴木春曙生　漢字ひらがな　言文一致　7枚

共究会会員諸君　和辻竜太郎　漢字ひらがな　言文一致　4枚

第五十回文章会　明治三十七年九月

会員諸君に告ぐ　漢字ひらがな　文語　2枚

文集　乙種会員諸氏　漢字ひらがな（一部漢字カタカナ）　文語・言文一致　11枚

長沢一夫　天宅敬吉　八木利一郎　高井肅夫　炭谷誠一　伊賀朝二　菅野修蔵

武村武二　樋口愛之助　菊池金次郎　魚住影雄　正井敬次　新井完　島田宏

春逝く空　哲郎（和辻）　漢字ひらがな　文語　3枚

一の谷の戦　黒坂　漢字ひらがな　文語　6枚

春のたび夏のたのしみ　丹羽　漢字ひらがな　言文一致　1枚

和歌　乙種会員　漢字ひらがな　2枚

天外の花園より　あき子（和辻）　漢字ひらがな　候体　2枚

戦の話　黒坂　漢字ひらがな　新体詩　1枚

観察は精細なるべし　一生（丹羽）　漢字ひらがな　言文一致　1枚

和歌　乙種会員　漢字ひらがな　2枚

馬蹄の花　花の三郎（黒坂）　漢字ひらがな　新体詩　1枚

航海の一日　夕鐘（丹羽）　漢字ひらがな　言文一致　4枚

九尺六尺小僧足下　哲郎　漢字ひらがな　言文一致　4枚

腰おれ　黒坂　漢字ひらがな　文語　1枚

五　魚住影雄の文章

以下に、魚住影雄の文章を載せる。

談話委員を辞する辞　魚住影雄（四十回）

僕任に始めて談話の委員に就きて未だ一回の開会の期を得ず。然りと雖、僕に於ては僕の意見あり。僕の主張あり。之を遂行すべき技倆に至りては未だ疑なき能はざれど細心精慮大胆に主張を実行し公平に意志を発表せんと欲せしも事に従ふに先ちて未だ蒲柳の嘆を口にして遁辞を作りしことあらざるなり

然り、僕は其技の十分頼むに足るや否やをも計らずして諸君に約するに相互の勉励によりて斯道の旺盛を期して談話委員を受けたり。蓋し衷心自ら頼むところありて然りしなり。

抑も談話の事たる、諛辞の巧みを習ふ所以に非ず。詭弁術を習ふ所以に非ず。況んや罵詈悪口に長ぜんことを習ふ事の如きをや。憐れならずや満腔漲るところの熱血と熱涙とを有し乍ら悶々の衷情を抑えて黙するもの。

自らの思想を明かに他に伝え能はざるは実に悲むべきなり。智備て辯ともなはざる者は到底字典たるを免れず。謂んや自ら意志を発表する他の一方便たる文章のごときに至りても亦此弁舌と兩々相俟って円満の成効をなすに於てをや。

実に辯は文と共に我等が成効の片翼なり。加之、其効を收むることの早き一回の演説に十歩の得あり。両回の談話に五歩の進捗あり。抑も演説なるものは偏に第一回の談話に其最重なる困難を感ず。之を再びするに及んでは先に経たりし所の羞恥の感、殆滅して再三再四漸次其巧を求むべく最初の胸腔鼓動して滿面紅潮を呈するが如きは遂に揶揄諧謔を交ふるに至る五回十回其方のよろしきに従はんか、懸河の雄弁其堂に上る蓋し易々たるのみ。

之を彼の熱球を原頭に弄して而かも輕躁浮薄の俗に陥るに比しては雲泥萬里其道途の安全にして其交遊の清淨なる、予輩共究会々員をして姫路中学の思潮の王権を握るに至らしむる畢竟此間の修養にかゝる。

僕が共究会を悦ぶ所以、こゝに其一因をなすなり。

故に之を諸君に勧め共に清談を咎にせんとす。而して僕今其局に当るに際会し諸君に向って其抱負を述べんとす。僕が滿足の情と喜悦の感は到底諸君が推察し得ざる底にあり。然り而して僕は僕が企図し来りたる共究話壇の抱負を中止して暫時諸君を去り談話会を去らざるべからざる時運に際会す。

僕が前に捧げたる滿々たる喜悦の感情は今は如何。昨の高きに比例にして今日の其千仞の谷底にある低きを感ずるなり。此感亦諸君

が想像の及ぶところに非ず。

実に僕は都合上寄宿舎へ入らざるべからざるに至りしなり。[70] 此境遂に談話会に都合よき位置に非ず。乃ち僕遂に其希望と主張とを犠牲として共究会談話会を去るなり。

然れども諸君互に切磋琢磨其技を練れ。またも相見ん日、今日の予が不満は慰せらるべき也。諸君許せ予が諸君の信任の栄を擲て寄宿舎楼上の人となる事の餘義なきに至りし事を（完）

共究会の衰微　梔花生（第四十回）

之を江湖に表白するが故に、衰微を曝露するを悲む勿れ。衰微は衰微なり。衰微遂に隆盛と称するを得ざるなり。只其衰微を自覚したる日、乃ち猛然其繁盛を期して可なり。姑息は遂に賢き方法に非ず。

共究会は実際衰微したり。生れて茲に五ヶ年、早くも老ひたるか、其の鬢髪幾茎も白を加へたる、之を研究し之が幸運を計る、実に目下の急務なり。

共究会の衰微はいつの頃にはじまりけん、予輩詳にこれを知らず。何となれば、父の病に走りて今年陽春、壱年振りに此地に入りたるが爲めなり。予輩の此地に来るや、既に衰微の現象を呈し居たりき。今之を各部に分ちて論ぜん

文章会

本年三月第三十八回文章会を発行す。実に三百有餘頁の大冊、予輩之を見て中心実に悦ばざるを得ざりしなり。仮令其内容に至りては、僅に三五子の手になるもののなりしなりと雖、然り而して蘇白前田君[71]を拱て之に参列して其高位置を占め得たりしもの、それ誰ぞ。香雲[72]は浪華に、蓼水[73]、浩々[74]は洛陽に入りて、共究文壇、其意気頓に揚らずなりぬ。実に三十八回文章会や、是廃残枯渇せる朽木の返り咲きのみ

あはれならずや第三十九回文章会は、委員の熱誠よく尽して三ヶ月を閲して、漸く百五十頁に足らざるものを発行するに至りぬ。実に難産と云ふべき也。而して其後の景況は如何、委員は拮据経営事に従へり。然も思はしからずして大に憂ひつゝある也。病躯意に任ぜざる僕をしてすら、強て起たざる能はざらしむ。共究会文章部亦意氣地なしと云ふべき也。

諸君、本文章会を如何に観察せるや。予輩未だ之を詳くせず。予輩をして本文章会の性質に就て、少しく述べしめよ。

四年五年の所謂大家《風を消》之諸君は、予輩の云ふ所に耳を傾くる要なしと雖、一二年級等新進の諸君、諸君、文はこれ戯むべきものに非ず、弄ふべきものに非ざる也。諸君等と予輩何れも其学程を等しくし、未だ多くの径庭を見ず。故に、相互の批評研鑽寸毫の効なきが如しと雖、然らず。自らの短所、自ら発見するに鋭敏ならざるは今更論ずるを俟たず。多作の効多き、また云ふまでもなし。而して諸君、諸君僅に一週に一両回、作文課主任の教師の採点批評に与りて以て其技量を練ることを得るとなすか。封建時代固頑の頭脳、何のよく諸君の作文の技量をして上進せしむるを得べき。由来文の技量は多作によりて始めて得らる。学校の如き僅に其技量を検して之を試験の成蹟中に算せんとするあるのみ。何の諸君を益するものやあるべき。

諸君文に巧みならんと欲せば多く作れ、多読もよし、然りと雖、多作に並行せざる多読は亦何の効もあらざる也。いたづらに熟字を羅列する事を知る耳。諸君が是作文の技をして上達せしめんには、多作の外道なし。多作よしと雖自ら之を篋底に秘めて人に示さゞるは亦其長所に伸びんとするもの、取るべき良法に非ず。短所を補はんとするもの、執るべき良法に非ず。多作以て之を批評者が筆に上って始めて向上し気運を得べき也。

加之、文はこれ閑文学に非ず、死文学に非ず。直接間接諸君を感化する所以のものならずんば非ず。諸君、かの俗物が相率ひて腐敗堕落、千仞の溪底に陥りつゝあるを見ん。これ彼等其眼なきが故也。趣味の缺乏せるが故也。然り而して諸君も亦相携へて腐敗しつゝある亜流にあらざる事を堂々宣し得るものありや、実に人を腐化するもの、趣味の涵養なき輩なり。我に超然たる意気と、天賜の趣味あり。何すれぞ其感化を受けんや。諸君たるもの亦必ず趣味に飢ゑたるものならん。然り而して之を何れのところより其供給を仰がんとする。文をよみ文を作るに非ずんば、豈諸君の崢嶸たる覇気と豊富なる趣味の供給を得んや。諸君自らが作文作詩の技量を練磨すべく、稜々たる真気を養ふべく文をよみ文を作る外其道あらざる也。

然らば諸君の或者は云はん。かくの如き迂路を経ることなくして我等の先輩は続々として卒業の栄を擔ひしに非ずやと。又曰く加之猶続々として進級しつゝあるに非ずやと。然り彼等さる迂曲をなさずして卒業したり、進級したり。然れど共思へ。此言果たして其精神的傾向を説明したるものなりや。諺に云はずや、乞食の子も三年たてば三つと。此言確かに人間勤勉の結果技量相応の成効を獲得し得ることを道破せるに非ずや。然り五年間を経過して中学の過程を卒業し得るは必然の理なり。何の不思議もあるなく、別に

称讃の辞を呈するの価値を有するに非る也。然れども、此徒果して品性の称すべきものあるか。諸君にして若し平々凡々たる進歩の下に特殊の趣味と品性を修養せんことの意なからしめば、われ何をか云はん、予輩の云ふところは道念を中心としての言なり。

諸君それ来りて共に読み共に批評する事の快楽を得よ。下宿楼上漫然放談する、決して諸君をして人間らしくせしむるものに非る也。

付記して文章委員に云はんと欲す。委員足下が勤勉周旋の労を執ることを敢てせらるゝ、余輩の大に感謝するところ也。然りと雖、足下の文章会の忠実なる今日以上に其力を及ぼす事を得ざるか。足下が多作、真に敬すべし。而も一片二片の廻章に投稿の多きを企図し得べしとなすか。年少新進の士に遊説する亦可ならずとせんや。予輩此点に就て足下の足らざる所なきやを思はずんばあらざる也。猶一言呈せざる可らざる所のものあり。足下何故に第三十九回文章会に於て批判の筆を下すことを敢てせざりしや。これまた後進扶助の道を得たるものに非る也。足下以て如何となす。敢て不敬を顧ず苦言を呈す。

談話会

弁論とはそれ茶屋の仲居が客を招くが如き弁術を云ふか。書生が空々漠々として、いたずらに空論を上下するが如きを云ふか。否、決して然らず。

今や秋気漸く身にせまる。談話会開かれん日、諸君の意気必ず高きものあらん。然りと雖、之を休暇以前に徴して、其衰微を測る、また決して危ふからず。何故に会員一般の気風、今日の如く軽々薄々たるや。真摯の風何處にある。あはれ俗子よ、少しく自ら反省しては如何。談話会場よく用意を整えて弁論をなすもの、それ何人ぞや。其論義の高尚幽遠ならざるは蓋し予輩一同の程度に比例するものにして少しも咎むるところなしと雖、口よりの出まかせ演説に至りては実に片腹いたき事のきわみ也。雑誌に見たることを述ぶるも苦しからざるに非ずや。一日行軍の談話も趣味に富めるに非ずや。何ぞ進で其弁論を試みんとはせざる。人必ず自らの思想を遺憾なく発表するに足る弁舌を有す。然も練り得て自在なると巧みならざるとは其熱心と不熱心とに比例す。之を得ると得ざるとは諸君の心得如何にあり。励むも亦可ならずや。

殊に共究弁舌会の弊風は今や其談話会なるものが何等談話に真摯なる士と熱心なる士とを缺き、真の練磨は殆ど其の実蹟を失ひ来れり。見よ悪口に等しく罵詈に近き討論会は昌え、二〇加と剣舞に茶話会は繁昌す。悪むべし此風、剣を舞ふて疊を破りて其品性の

陋劣を自白して何の得る所ぞ。菓子を食ひて胃を壊ひて何の得るところぞ。二〇加、落語の類に非んば一般は之を解釈し得ざるまで其趣味は下劣なるものなるか。何故に運坐の類を催さゞる。これを憚るは一足飛びに大成効を得んとするに出づ。本会たるもの、一般の趣味に叩頭して堕落腐敗する必要あらざる也。本会の趣味を解釈し得ざる輩は之を退会せしめて可ならずや。

本会談話会をして今少しく清淨ならしめよ。真摯ならしめよ、然らずんば志あるものは退きて来らざるに至らん。これ予輩の希望也。これ予輩の今後執るところの方面なり。会員自ら少しく反省せば如何。

運動会

此物や只本会の片隅に附属せる一物のみ、本会の命運に関係あるものに非ず

元來、本会の性質上、運動部の重視せられざるは必然の数なり。若も此部の設けられたる所以のものは趣味低下なる下級諸君を誘はんが爲め也。誘ひて以て共究会化せんとしたる也。中途、村上・小泉氏等起り之に和するものありて、其盛を来せしも、これ遂に一時不規則膨脹の現象のみにして、何らの効績と印象とを本会史上に止めざりしは、其性質の十分の融化をなし得ざるに因る。一時菊池君の之を行軍組織に変更せんとしたる、趣味を尊ぶ会員一般の傾向が此乾燥なるベースボールの類に満足し得ざる点多きを観たるが爲めなり。然も時可ならず、意志堅らざるが爲めに断行せられざりしは遺憾なりし事共也。

実際上、一ヶ月に一回乃至二回のベースボール、何の功能やある。フートボールに私憤を漏すが故き輩の出るあらば、益以て心得ざる結果なるなり。ベースボール何の爲めにする、運動の爲めか、然らば実益少し。癈するに然かず。技量練磨の爲めか、実益、零（ゼロ）なり。亦癈するに然かず。添物的運動は之を癈するに然かず。共究会は性質上文芸の倶楽部なり。添物を以て客を引くが如き挙は断然癈するに然かず。況んや其実益あらざるをや。予輩は其組織の変更を見ずんば運動部の癈止をよろこぶもの也

結論

運動部の事は措て問はず。今日本会文壇弁壇並び振はざるば蔽ふべからざる事実也。委員其人を得ざるか、会長事に冷やかなるか、会員の自堕落なるか、予輩敢て知らず、文章部委員が其清新なる趣味の注入に尽さずして、可成的一般の歓迎を得ん事を勤めつゝあるは事実に近し。談話会が講談師風の弁舌を以て其精なるものと誤認して真摯なある曩日の風を存せざるは事実也。

かくの如き現時の本会が何の理由ありて生存せるや、改革の希望あるが爲めならずや。改革の希望あり。然るを何の故を以て躊躇

するや。

見よ学校が陰に陽に小会の存在を非定し妨害せんとしてあるに非ずや。予輩其意の那辺にあるやを計り知るに難からずと雖、今之を云はざるべし。然も今日の如き状態の下に小会の存在を断禁せられなば、何の理由を以て拒絶せんとかする。役員諸賢、会員諸賢、恐くは辞なかるべし。予輩深く怖る、狡児あり、機の正に然るべきを告げて、其小会の癈滅の断行せしむるあらば、今日の状勢、弁護攻撃甚苦しからずんば非る也。

衆盲の喧囂何かあらん、事実に於て本会が姫路中学思想界に貢献する事決して少なからざる也。愚物四百の頭臚を済度して其美を済さんには、全校の八分の一の会員を有して、衰微振はざる共究会てふもの、中なる愚物よりして先づ済度せざるべからざる也。予輩は断然予輩の意志を遂行せんと欲する也。会員の意気込如何。役員諸君覚悟ありや。切に中須会長の猛省を促さずんば非る也。

餘興（第四十回）

六月二十三日夜、本会第五周年紀念祝典の催しあり。われ亦其席に連る。祝辞あり。終って餘興あり。

われ元より無藝、遂に皎葉君にはかり一策を按じ、之をもて餘興とす。

白紙を三截して席上の各人に配附し何なりとも書かれたしと云ふ。匿れ書くもの、出差張って書くもの、大に好況なり。暫時にして皆我手にかへる六十枚の紙悉く尽して一同の希望に應ずる能はず遺憾なりし。

今これを列記す。但し多少取捨したり。

あけて（ゆかしき？　くやしき？）玉手箱！

《以下、梔花のもののみ掲げる。》

○五月雨れて壮士あつまり剣を舞ふ　梔花

○中々に思はざりけり会員のかくまで多くつどひ来んとは　梔花

○五月雨や読経の声のしきり也　梔花

これで終りを告げた

如何に無邪気に愉快をきわめしかは読者の想像にまかせ又いくばかり幽遠なる風懐ある高士の集会なりしか、これまた想像に任ずる。

不熱心辯

梔花生、傾者、肺尖と気管支をいため、加ふるに神経衰弱脳貧血等の諸症を得ていたづらに草根木皮の事に忙く満腔の覇気を抑てしばらく本会場に諸君と見えざらんとす。諸君それ憫んで咎むる勿れ

実に蒲柳のなやみに堆志思ふにまかせず、かなしさにたゑず。今月文章僅にこれのみ。慚愧にたへず作り得て二十枚を得たれども家兄来りて携へかへる。乞ふわれに百日の暇を与へよ。健全なる思想を抱て健全なる肉体を得て再び見えん時、下暑に向ふ、諸君自重せよ。

科学の研究　梔花（第四十回）

予輩不敏にして常に数学と語学の成蹟の宜ろしからざるを示し学期毎の試業の結果、此小言を頂戴せざる事蓋稀れなり。當学期亦り。

然も常に毫も意に介せざりき。而して自ら所謂く、科学は到底乾燥なり、無味なり。予輩、趣味を尊び、趣味を愛好するもの豈かゝる無趣味なる学課に力を尽すを得んや。試験の採点簿に得点の多きを誇る輩の如きは畢竟自らの性情の陋劣を曝露せるものにして歯するに足らず、と恐くは今之見を有するもの決して少なからざるべし。然れども第三年級の二学期なりけん、代数課の得点大に少く甚く注意を蒙れり。此瞬間予輩は自らが数学的智識に缺乏を来せるを見て衷心実に憂々、其学期は稍励みたるが如し。其結果今は確かに記臆せざれども代数六七、幾何六四前后の成蹟を得たると同時に英譯課の採点僅かに五〇、之を見て冷汗背を流れたる也。此成蹟を見て予輩は之が研究を連続することを得ざる悲境に住居せざるべからざる身となりて、今年四月来りて再び入学するや両課に於ける予輩の成蹟は以前として不良なり。数日以前注意を蒙りしは主として此種の学課にかゝる。然れども予輩が過去の僻見は本年再入学と同時に流ひ去られて科学重視せざるべからざる事を覚れり。予輩元より特殊優等の課程を有せざれども国語、漢文、歴史、地誌、動植物の課程は漸く水平を保ちて下りたることなし。然れども学課文法、英語、数学、化学に至りては甚不立派なるなり。此陋

見を破りて新しき光を認めたる一は朋友の勧告と、一は書籍の黙教と山本先生の注意と、一は自覚にかゝる。而して之を確かめ得たるは実に山本先生再三の忠言と春山作樹氏及森川智徳君の訪問なり。

自然科学（ナチュラサイヤンス）及語学（ヒロロジー）の素養なきものは到底高尚の学程に上る事を得ず。理工課はもとより仮令之が純文学に至りて然らざることなし。殊に哲学（ヒロソヒー）の如きに至りて、其痛切なるを感ずる也と。

あはれ我夢より覚めて病を得て引き続き失敗したり。今や秋天気節人によからんとす。一倍の奮勵以て此課に於ける成蹟をして水平ならしめんと欲す。諸君中若猶此曲見を有するものあらば来りて予輩が門を叩け。過去の罪を悔ひたる予は諸君の爲めによき傳導師たらん。

然れども思へ。予輩以上の事を悟りたりと雖、自然科学語学の必要と重要とを切りに感じたりと雖、彼の文学的趣味なき偏に得点の多きを誇らんとするが如き輩は決して尊重せざる也。予輩の貶る方面は較軟の調和に在りて存するなり。

青年文士の品性（第四十回）

乞ふ、予輩の苦言を許せ。見よ淘々たる世風の走る所、学生一般の風紀の頽滅、何ぞ甚しき事の今日に至りたる。予輩前会文章会に於て之に就て聊か述ぶるところありたりき、乃ち今之を繰りかへすことを敢てせず、此濁流澎湃たる中に稍其品性の完き節操の堅きものを選ばんか。それ一派文を好むところの徒か。煙草にあらずんば笛、雑談に非んば拳、学生の娯楽の趣味、何ぞかく低きや。彼等は立川乃至長栄堂の奥に於て菓子を喰ひラムネを傾けて以て其所謂通人の気風に従はずんば生存し得ざるか。学生らしき交際を得ざるか。実に憐れむべきは彼等ならずは、然り学生堕落の近因は趣味の低下にあり。いたづらに乾燥無味なる教科書にのみ齧りつくを以て無上のモデルスチューデントなりと思惟して彼徒を歓迎優待する盲目なる教育者輩か愚や実に笑ふに堪えたり。学校的の優等なる成蹟を有せる輩が其品性の陋卑なる、蓋し茲に所以す。換言すれば学術のチャンピオンとして其信用中外に厚くよく一級の牛耳を執る輩と雖も、これ所謂モデルスチューデント耳。其眼は薄紙をも蔽はれたるが如く、色彩の美も映ずることなく、其耳は臘を以て埋められたる人形の如し。自然の妙楽、遂に彼輩の琴線に触るゝことなし。然り、当てにならぬは輿人の重望を擔ひて立てるモデルメンなるかな。彼遂に俗物！

あはれ世にも賢く見えたる教育者も内部の缺乏を常に外部に求めんとしつゝ、續んとして其失敗劇を演じつゝあり。万年を経過するも魚は木に棲まぬものなるを

論旨、稍もすれば岐路に入らんとす。則ち却て説く、教育者の翳ある眼と学生の卑陋なる趣味とは遂に彼等を闇黒界に埋没せんとす。この時にあたり微力よく衆と爭ふに適せざるを恐れず。趣味の清泉をこれ等腐腸漢に向て注ぎたるもの、それ学生文士の徒か、然り文学的趣味を有せる一派の閃光や、遂に闇黒界をして反応を呈せずん止（ママ）まざるに至らしめたり、また偉ならずや。

深く謝す。彼等一派の詩眼ある徒よ、卿が賜物は実に忝かりし。それが爲めに俗物稍趣味を解し又向上の気運を得たり。

然れども思へ功は功として誇るべきものに非ず、罪は罪として却て大に責むべきものに非るなきや。

輿人の着眼点漸く趣味に向つて進むや、モデルメンの黄金時代は経過して此徒の漸盛時代に推移したり。然り而して早くも亦旧轍をふんで再び以前の形勢に変遷せんとす。自然の配合を見るべく鋭俊なる文士の徒は此時局の移動を観察し得ざるか。輿人が此徒に向て捧げたる所の尊称と畏敬の衷情は漸く減じて之を技量視するに至れるに非ずや

而して芸術なる一重に技量視すべきものに非ず。芸術の美如何に巧妙なりと雖これ術美のみ。うまく成效したる人形の如し。加之其技量なるものも亦零細未だ数ふに足らず。僅に無鳥島内蝙蝠の誇張也せるものと同一なるをや。而も文士輩が曽て以前に与へられたる名誉＝それは尊敬の對度をもてせられたる＝を思はずして今日の讃称に満足したるは如何。

予輩断言するを憚らず。一二其技量に於て成效したるものあるは蔽ふべからざる事実に存すれど、其の当初に於ける気鋭なる抱負は全く消耗して、一意自らを藝人の低位置に下らしめんとしつゝあり。

技量視しての名譽は遂に彼等を満足せしむるまでも墮落したり、咄これまた俗物か！

予輩頑固輿衆と一致し得ざるもの一角ならず、文士も徒なるものと合同事に從ふ能はず。――不敏清濁合せて呑む能はずして、今日の未進の地置に安ぜざるべからざるに至れり。然り予輩彼等先輩を其美を愛する点に於て其着眼を異したる故を以て、遂に百里の後程驥尾に附して蝸牛底の進行を継続して毫も咎しからざるなり。予輩の茲に至れる藝人たるを憚るが故なり。

直言せん。今日文士の品性は劣等、彼之蠢々者流と選ぶなし。其言は其行は如何。其談話の不潔卑猥なるに至りて、憚りて云はず、其挙動之私行に亙るものもまた措て論ぜず。其公的行為に於ける文士の位置に就て少しく云はしめよ

文士、文士！　何に故に十七字に自然の美を唱はんとす。三十一文字に其感懐を述べんとす。小説や戯曲や何によりて編まれたる綴られたる、之を云ふを俟たず、

果然、文学や死文字に非る也。軟弱婦女子のなす所のものに非る也。然り而して各文士のなす所如何。敢て事局に遭遇せずと局弁する勿れ、其一挙手一投足悉く彼れが意志を代表するもの、而して其其意志の彼の儒弱文士の如くんば、闇々裡の感化はもとより寸効を其人に与ふるを得んや。口に風流を氣取って、其行に醜陋見るに堪えざるものあらんには、其教化の及ぼすところ、風紀の弛廃に加ふるところ、豈無からんや。汝正に亙らん日、汝が信任は以前の畏敬に亙らん。俗人の喝采を欲するは俗人の業なり。彬々たる姫路中学幾多の文字ある文士よ、少しく省みるところありて其品性を陶冶しては如何。由来衒気は美神の悪くみたまふところならずや。予は断じて今日青年文士の品性の陋劣なるを信じて疑はざるものなり。

其陶冶の急を認むるものなり、見よ予輩が公的行為を、

争は避く可からず（第四十回）

これは、さる日、交友会にて、なせし演説を、文に綴ったものであります。

或る日人は、老成じみたものは、学生の禁物であるのに、君のはなしは、学生らしくないではないか、と申しました。老成じみて居るか、学生らしくないか、そは私の関せぬところで、私は、私の思想ありのまゝを、語ったのであります。彼の人とても、人の思想まで、束縛する事は、出来ますまい。さても窮窟の世の中かな、穴かしこ

諸君、試に眼を、諸君の四周に注いで御覧なさい。世の中は、争闘を以て、滿たされて居りませう。歴史は、歴々と、此争闘を筆記して居ります。或者は感情の衝突より、或者は嗜好の相違より、乃至私慾のために、又は正義の爲に争闘を致します。

かくの如く、人は、人若しくは社会と、国は、国若しくは時勢と争ひつゝ、世界と人類は、茲に推移したのであります。

鄭成功が、三千の兵を率て、臺灣に據って、亡びたる明朝の恢復を図りましたる如き、青史に伝えて最美なる事であります。

保元平治の乱の如く、慾の間違ひから、骨肉の者が争ひ、又血縁の者が戰ひましたる様な、かくの如き醜態は、開国以来稀れなるものであります。

争ひの勝敗は、其擧の美醜を判する所以のものではありません。世に、俗人の時めくのも此事であります。

兎に角、世の中は、かくの如く正しき理と、不法なる乱暴とを以て、箇人乃至社会が、不断争ひを止めないのであります。

かく此世及び箇人は、争ひつゝあるのでありますが、我等は争ひませんか、我等は闘ひませんか。

生命なき道徳は束縛せられて、世を安穏無事に渡らうと、考えて居る様な、卑怯千萬なる、自稱道徳家なるものは、いざ知らん。血あり涙あり、自由を愛し、平和を尊ぶものは、皆争ふべき筈だらう、と思ひます。

我等は、其義務をつくした上は、其権利を主張する價値のあるものでありますから、其義務に缺けた所がないのに、其権利を享くる事が出来ん場合は、其権利を要求するために、争ふ要があります。正しい人のみでない此現實社會は、我等が正になすべき事を、なして居るのに、権利を与へて呉れぬ事が、屡あります。此時に当っては、沈黙を守るのは、大に恥づべき所業でありまして、かゝる無法なる者に対しては、飽くまで争はなければなりません。然からざれば、天より与へられたる平等の権を放棄した事になります。間接に天を侮辱する事になります。

此時に際して、彼の道徳家が、我等を戒めますには、かくの如く、平地に波瀾を起すのは、君子の行でないと、申します。

乍然、道徳家の言は当りません。かくの如くんば、世に君子程窮屈な生涯はありますまい。君子とは、綽然として、少しも苦しい思をせずに、善をなし得る人でなければなりません。道徳家の言に従ひますれば、君子とは安寧も、利幅も、受け得られん人となります。

毫も、我等は平地に波瀾を、起すのではなくて、却て波瀾を静むるのであります。

人乃至社会が、皆其権利を享受して行くならば、其秩序は、一糸乱れずに進むのに、かゝる不法なる人間若しくは社会が、此秩序を乱そうとし、静かであるべき筈の平和を、破らうとするのを、我等が鎮壓するのであります。波瀾を起すのでないことは、明かです。

然し、波瀾を大きくするだろう、との問題が起こります。

よし我等の主張が、波瀾を大にするものでありましても、それは餘儀ないて事情で、恰も楠木正成が、波瀾が大きくなるのを恐れずに、後醍醐天皇の召に應じた様なものです。論者の言葉に従ひますれば、此世の中は、波瀾がない代りに、活気がなく、俗人悪人の

巣窟となります。

我等は。勿論大義を知り、人道を解して居ります。之を知って居る計りではなく、之を解して居るのみならず、之を行ひ、之を蹈まんと心得て居ります。乍然、自身の自由を束縛せられ、安事を破ぶられ、幸福を奪はれても、猶之を士君子の行だなど云って、宥恕否屈従する様な卑屈な事は出来ません。

無氣力極まる、乾燥せる道徳家の様な、融通のきかぬ人間には、我等はならうとは思ひませんのみならず、又かくの如き人間たる事を恥ぢます。

しかし他の一人が申しますには、我等は、今修養の時代であって、活動の時代でないと云って、我が所見の破壊を試みます。

淺薄なる考へでは、一応尤もの様にきこえます。

なる程、吾等は修養の時代でありまして、活動の時代であります（せん）、勿論、我等は策士的に活動する時代ではありますまい。自分の智嚢を絞って、勝を千里の外に決するとか云ふ、政治家の如き活動をする時代ではない事はたしかです。まして淘々たる、彼の群小才子の如く、自身の器量を、人に示す時代ではありません。

乍然自身の立脚地を定めて、其権利を主張するのは、かゝる小才を振りまわす事ではありません。飽くまで、自身若しくは社会を、幸福の地に送ると云ふに止まりません。故に、我等は、世と国と、人を幸福ならしめんために、之を妨げんとし、之を害はんとするところの、敵と争はなければなりません。それは、自身の才能を吹聽するのでなくて、正義公道の、いかばかり犯しがたいものであるかを、俗人共、愚物共に教えてやるのです。

○　○　○　○

諸君、此社会を、此社会の人は、絶えず我等に、研究すべき問題を、与えるではありませんか。

社会の問題は、社会を組織して居る人の、研究すべきものでありまして、社会の人は、皆其境遇相應の、解釋せなければならん問題を持て居ますので、我等〈の前に〉も亦、我等の境遇相應の、解釋せなければならん問題が、壘々として横って居ります。

此問題は、我等に賛成か否かを、求めます。

又、これ等の問題が、賛否を求むる前に、人は解釋しやうとするではありませんか。

其證據に、人は皆、社会の出來事を、批評的眼孔を以て見て居るではありませんか。比較的態度を以て向て居るではありませんか。左様我等は、批評し、比較し、解釋するのであります。一事一件、皆之に対して、我が態度を明白にせなければならんのです。勿論、我等が、政党がどうならうが、知事の交迭（ママ）があらうが、何も云はないでもよろしい、然も人の思想でありますから、小学の生徒が、文部大臣の悪口を云ってもかまひません。

世界の誰彼が、種々の問題に對って、解釋を試みつゝあるのは、疑もない事実ですが、皆、如何なる問題に向っても、自身の態度を、明白にして居ますか。

殆んど歯牙にかけるに足らん小問題に、コセコセとたぐりまして、重要なる問題には、毫も口を入れず、たまたま口を挟んでも、茫膜（ママ）たる事を云って、唯管に責任を竄れ様とし、難題を曖昧裡に祭り込まうとして居るではありませんか。卑屈卑屈、意氣地なしの絶頂であります。

我等が、問題に対する意志を発表するにつきましては、屢々争ひが生じるでしゃう。

趣味が違ひ、着眼点の異るものが、解釈の意見を均しくし得ないのは、止むを得ぬ自然の数でしゃう。

我等は、四面の意嚮がどうであらうが、只一意義なりと信じ、美なりと感じ、貞なりと悟ったところのものに、賛成すべき筈であります。此態度を取って、争ひが起れば、争ふまでゞす。

我等は、社会の皆と調和する事は出来ません。一部とは同盟し得ますが、或者は排斥します。これは、あながちに、我が狹量なる故ではありますまい。若しこれが狹量でありとしますれば、そは我等には、清濁併せ飲むとか云ひます政治家的の雅量がないのであります。我等は其異分子とまで調和して、良心を束縛する必要は毫もないのであります。

世には、八方美人なるものがありまして、其所見を、甲の人と同じくするのみならず、乙の人とも等しくし、天下萬衆を其観察を異にしない、便利且重寶なる、奇怪極る飴細工の様な人間があります。

彼等は、主義あり、定見ある人を指して、極端論者を嘲り、甚しければ、消極的人物などちう標語を下します。

彼等は、衆論に附和し、雷同し、大勢の明かならぬ時は、曖昧なる態度を執て、責任から免れ様と致します。擯斥すべく、笑ふべきは彼等でありまして、之れが即ち消極的人物であります。

かくの如くに、社会若しくは、其人と争ひますのは、元より物數寄でするのでないのは勿論の事、野心があるでもなければ、自ら用ひるのでもありません。眞理の何たるか、人道のいかなるものかと云ふ事を表白しますので、我等の正につとむべき事であります。これは、決して我等に、団体心がないからではなく、共和心がないのでもなく、一致心が乏しいのでもありません。又傲慢不遜の挙動でない事は云ふまでもありせん(ママ)。

勿論、我等は、社交的道義を知らんものでもなければ公けの義務(パブリックヂウチー)を解せんものでもありません、

我等が信ずる所が、社会の輿論を合し、第二者と均しくなった時には、双手をあげて美挙の成効に盡くす筈であります、

若し我等に、団体心共同心が缺乏して居るとしますれば、我等は団体までも組織して、社会の秩序を害うとする様な、団体心に全く缺乏して居るのであります、

若し我等に社交的の道徳がないとしますれば、それは、良心を束縛してまでも、社会に阿り諂ふ様な、圓滑主義とか云ふ、卑劣な社交的道念がないのであります、かくの如き、我等の、社会に盲従しない所業は、平和の天地を、攪亂するでしゃうか、若し我等が、箇人と合はず、社会と反動しまして、平和が破ぶるゝ様な事になりましたならば、それは自然がかくあらしめたのでありまして、悪るい事でもなければ、避くべき必要はありません。進んで其争乱の渦中に飛びこんで、此處から雲を呼び風を起して、新生命を導き以て、陳腐を変じて清新とすべきであります、此後に樂しき平和が来るでしゃう、昔米国独立戦争の開かるゝ一ヶ月程前に、パトリック、ヘンリーが、ヴァーヂニヤ州會の、開戦可否の討論に当って、戦って以て、永遠の自由を買はなければならんと申しますと、或る紳士が、平和平和とと叫びました、此時、パトリック、ヘンリー如何に答へましたか、

生命は、奴隷の辱かしめを受くるをも厭はざるまで惜しきや、将た平和は、暴政に甘づるまで樂しきや、噫、天よ、庶幾くは、我同胞の此腐れる腸を浣はせたまゑ、庶幾くは、自由をたまえ、然らざれば死をたまえ、と

我等は、彼の紳士の様に、奴隷の待遇をうけても命を惜む様な、又壓制せられても病的平和に謳歌（嘔）する様な、卑屈な者ではありません、紳士の如きは、日本で云ふ道徳家と云ふ虫のよい人物であります、

我等は社会の権利のため、我等が権利のため、若しくは、社会の幸福のため、又我等の幸福のため、敵を排し、真理の光を明瞭ならしめんためには、消極的人物、極端論者、平和の破壊者など、云ふ有り難からぬ名称をも、暫くは、忍んで受けて置かなければなら

んのであります、
西洋の諺にも、憫まるゝより悪しまれよ、と云ふ諺がありますが、隨分亂暴な諺ではありますが、此間たしかに半面の真理を含くんで居ります、
争ふ事を避け、挑む事を止めては成効は来ません、座して成効を求むる人は、木によって魚を求むる人であります、
懶惰な人から、科学は、大發明大発見を齎たらさなかった様に、平々凡々、萎微退嬰を以て、至高の道徳と考えて居る様な人よりも、亦壺中の小天地に、沸々と天の大を論じて、不平を云って居るやうな、所謂慷慨家とか云ふ人物から、社会の惰落が救はれた事もなければ、其利福が増進せられた事をも聞きません、
争はなければ、成効は来んのであります、戦はなければ、異分子は、排斥出来ません、
さりとて、争ふと云ふ事は、戦争とか、格闘とかの意味のみではありません、
鄭成効（ママ）の戦争も争ひなれば、和気清广呂の復奏も争ひであります、
段々と述べてきました事は、つまり、我等は社会のために、又自箇（ママ）のために、其安寧と自由と秩序を保護するためには、其身命をも、犠牲といたしまして、水火も避けずに、滿腔の力を集注せなければなりません、と云ふ事です、
かゝる場合に、尺蠖の屈するは、延びんがためなり、など云って、我が論城の破壊を試むる事は、許しません、この諺の始めは、臆病者が、遁辭に用ひてから、世に擴がったのであります、
佐倉惣五郎――日本には、古來稀れなる――は、死んだではありませんか、大塩中齋――社会の幸福に身を忘れし義人――も、死にました、
精神の修養も、品性の陶冶も、社会風俗の僑正（矯正）も、大なる意氣と、大なる熱心と、大なる至誠と、そして大なる沈静によりて来りたる、大なる決心と、大なる勇気があって、成し遂げらるゝのであります、
言ひかへますれば、我等は進んで、真理のために、敵を作るべきでありまして、真理擁護のために、殉じますのは、人間最高の、権利であり、又名誉であります、

暑中休暇（第四十回）

本会五十の会員諸君、諸君半百の炎天を其郷里に於て如何に費消せしや、天漸く秋冷に向ふ、今に至りて暑中の事を談ず、暑中休暇、暑中休暇とは如何なる性質を有するものなりや、齷齪百日の学窓を去って惰眠を貪るところなるか、あらず然らば如何、予輩の見を以てすれば、暑中休暇はこれ暑中休養なり、乾燥無味なる科学の研究、決して予輩の健康によろしきものに非ず、予輩此休養期を以て、精神修養に供すべきものなるを信ず、肉体の強壮を計るべき期なるを信ず、

下宿楼上の不秩序不整頓なる生活は、其品性をして疲癈せしめ、其良心をして魔靡せしむ、風塵不揚清風徐ろに来るところ、今古の書に其腐腸を洗濯せざるべからず、怠慢なる其言動は決して父兄をして安堵せしむる所以のものに非ず、果然此休暇は精神の修養に供せられたるものなり、

立川に菓子を飽食し、書籍と首っ引きの勉學は、其胃を暴し、其脳を撹乱す、休暇は此為めに、肉体の恢復期を與えたり、

囲碁や、午睡や、乃至、弄花豈休暇五十日の一秒時を占領する権利を有せんや、諸君此好期を如何に費したる、

闇夜　諸君の加評を乞ふ　梔花生（第四十三回）

敢て問ふ。人間何れの辺に快楽を得て安んじて生にあるや。われ近者煩悶日にきびしくして胸中の焔また油を注がるゝこと日に夥し。外何者かを求めて得ず内悲觀益たゑず之を人にたゞせば人口を噤して云はず陽に其幽味あるを讃するものは陰に紅舌三寸嘲って世務に遠しとなす。つら〳〵観ずるに一切の家あるもの瞬時も常體なく刻々相移り時々轉變す流水もとの如くなれども水遂に元のものにあらず。一たび去れば影杳々《原文は「沓々」》として無限の彼岸に沒す山態旧に似て去年の新緑遂に今年の枝頭に上らず。人も亦然り　世相の無常を思へば朝の紅顔はたして夕に白骨となるものならざらんやわれや先人やさき黄泉のさゝやぎは殆んどたゑざらしむ。業風すさめば骨肉もはなれざるべからず　何すれぞわれ耳を人の樂に止めて安居無憂の境を知るを得んや。誰か云ふ厭世を不健全なりと　乞ふ　聞け　厭世もし真理ならば我天下の人とともに手を執って黄泉に下らんかな。牽強付會して以て肉慾に戀々し自らを侮るを要せんや。一切の顯象本来是空ならんか　われ従容として其轉変裡に人たらん。眼を脊にして世を見て以て得々たるものあらんか　我其の理に悖るを鞭韃して不健全をのろはんとす。何れか是　何れか非。才子よく這般の問題を口にせず而して天下の議に

當る人は無義に動て歓喜しまた喝采す　また滑稽の甚だしきものなるかな、畢竟する處自らの編みたる楽天観と厭世觀との假設を除て沈思一番以て公平なる我衷情の訴ふる所を聞け、然る後一言我後に説くところあれ　我未だ自己を中心として反省の要を非認せんとするの根據を有せざるなり。

宇宙に森羅する萬象が依って始りし日を思索するにわれ敢て之を無限の昔に考ふるの難きにつかずして略想像するに堪ゆるなり。星雲の時代豈限あるものならざらんや。されど一たび時間の始りし時を念ふに脳乱れて漠然として濃霧を行くの思あり。無限の昔に始りし時間は今も刻々として行くか其つくる日は何日ぞ。哲学者も云ふなり　時遂に始終なし　無限に始って無限に続くと。あゝ奇なるかな時間はあらゆる最も奇怪のものならずや　人のうつるはさもあらばあれ山川の轉移や何かあらん時の経過する前には国なく地なく天なし　たゞ宇宙てふ空間の存するのみ。国何者世界何者一定の時間を無限の間に畫して空間の小隅に介在す。幽ならずや妙ならずや空間涯りなくして地球遂に大洋の一粟に如かず　時間盡くる期なくして歴史遂に一瞬時の短かきに類す。竹帛千載の名　何ぞ人をあやまつことの甚だしきや　千載永きか萬年久しきか　われ時間の分に比するの値なきを見て一轉瞬のひまなるを観ぜすんばあらず　況んや其称して大活劇場と云ふ　地やまた空間に其分を称するに当たらざるに於てをや。われもはや此世をたのまず否頼む能はず。

瞬間の閃光もはや我を魅するにはあまりに微かなり。亡ぶる世に立ちて限ある歴史を頼むものは禍なるかな　欲するところは物質なり　願ふところは肉慾に過ぎず　物質遂に永劫に連綿するものに非るを如何にせんや。假令理学者の物質不滅則を信ずるとせんも将たしてそこに快楽の不滅を認識するの餘地ありや如何。如何なる方面より論ずるも此土地を絶対視して之に安心の立脚点を發見せんとするは到底不可能なり　何となれば不朽の光栄は無限絶對に從ひ有限の上に絶對無限を發見し難ければなり。われ断じて云はん此土に不朽の栄を立てんとするは空中に楼閣を設け水上に龍宮を夢むに等しと　風あらなくも波あらなくも根底なきものは始より起りて無限の後に続く歴史は有限の昔に始まって有限の後に没す地上の事業は空のみ。

幾万年を限りたる青史に名を残さんとするもの猶憐れむべし　少くとも時間的観念を没却し居らざればなり　たゞ之を以て絶對となしたるを愚とし笑ふのみ、然れども世には半百載の肉情を恣《原文「咨」とする》にして　人間の能事終れり盡くせりと思惟するもの多し　人とはさる動物的卑近のものなるか　酒に非ずんば色口腹飽けども情慾妄りに静らず。春眠半宵の快以て慰むるを得るは何

が故ぞ　罵倒せんに辭なく唾棄するには餘りに憐れなり　われたゞ何をか云はん　地球亡んで始て万事休す考ふるものは猶教ゆべし肉体亡んで万事休すと考ふるに至ては野良猫の沼澤に死して臭四邊をうつに例ふべきのみ、五十年の肉慾に任ずる動物的生活を以て人生の真意義と定めんか　我は敢て否定するの権なし　或は然らんと答せん　されどわれ断じて之に満足しがたしと云はんのみ　其何の故なるかに就て問ふ勿れ　これ我感情にして我事実なれば安心の標準をこの点に定めがたきが故のみ。地球の生命と共に消長する歴史に名を止むるを以て人生の真意義とせんか　われまた之に甘んずる能はずと云はん　寧ろ前者をとらん　何となれば前者は或程度まで普偏的なればなり　一将功成って萬骨枯る　これ到底人生の面目にあらず、或人曰く意識は不滅なり

力は不滅なり　われ之に安んぜんと　われ遂に其廣量を憐まずんばあらず　其何れの邊に我が感情が働てしかく云ふなるか　われまた知らず　エネルギーやかゝる抽象的不滅則たゞ一の假設のみ　砂を盤石に例へたるやも計りがたし　設計計劃或は成らん　然かも材を運び之に鋸を加ゑて後成らすんば假設はあまりに頼母しからぬに非ずや。茲に於てわれは科学と哲学との常識に従て不朽の安心立命の地なき事実を見たり。

敢て問ふ　諸兄卿等は何の上に如何なるものを立てゝ平居安住の態を示せるや。卿等の血色はあまりに平和の相を顯はさずや歡喜の聲は如何なる邊より響て卿等をしても若かく自若たらしむるや。思へ世は轉変常なくして科学者も之を承認するが如く此地球は遂に滅亡に入るものなり。卿等が仕へて絶對視せる此邦國なるものはしかく神聖なるものには非ず　恰も太初創世のころ天地渾沌の裡單細胞の生物生ずるや

営々として自家の利を求めしに等しきものなるを知らずや、單細胞獨立をやめて統一的生物活躍し其物また種族相集り部落相合して世はます〳〵進化發展し箇々自らを捨てゝ團結成り洲成なり國を成せり　しかも進化の大道はやまず　遠からずして渾圓球上一箇の調和をなさんとす　其前には國無し　君主元より無し　正に然るべきなり。却て説く　今日自ら目する所の絶對は絶對に非ずして実にはかなく実に悲むべき所謂穢土に過ぎず　科学之を証明して之を教ゑ哲学之を證して残りなし。人何が故に之を見捨てざるたゞ一箇の絶對者(Authority)あるを默契するが故に非るか。されど憶断は之をなさじ　少くとも我は憶断想像を捨てゝ物質の偶然的聚散に成立せる現世を見ること弊履も只ならず　されど微光天来してあるものを默示す　われ只之に一片希望の念を纜で蠢々たり。然れども未だ全く認識し得ず　故に不安あり不安あるが故に苦痛あり　苦痛あるが故に煩悶あり　煩悶あり　何ぞ訴へずして默するを得べけんや。然

り而して卿等は年を同ふし識の範囲に径底なし　しかも満々たる歓喜に鼓攘するに似たり　羨望の念にたゑず　故にもって卿等の現世に對する態度を聞かんと欲す。男一匹盲從して無意義に生くるの笑を招くなからんと欲するものは進で所論をはけ。まさかに無意義の生に安んずるが如き醉生夢死の徒に非ざらん也

小生心霊上の要求に號叫すれども得るところなくして煩悶日にきびしく悲觀のみ甚だしくして殆んど闇夜を辿る思ひのするまゝに願くは會員諸兄遠慮なく金玉の所論を惜むことなく加評の栄をたまはらんことを　高井君乞ふ　諸兄の人生觀に就て逐一洩らすところあれ

明治三十四年五月六日夜　東京にて　魚住影雄

主義の声　梔花（第四十三回）

いたづらに主義の乏しきを慨くなかれ　日本帝国　決して主義の缺乏を憂ひず　市に至りて見よ　書肆が店頭を飾る所の断簡零册これことごとく《原文は「ことゞとく」》主義の聲なり　曰く自由主義　曰く世界主義悉くこれ主義の反響なり　大量海の如き日本君子國の紳士は蟻の這ひ出づる程の孔あらば直ちに小異を唱えて叫んで曰く主義一致を欲く　神を連ぬる能はずと確信山の如き硬直の士は此島帝国に充満して今や其不足を感ぜざるに至れり　國運日に隆盛に内は財政充実し外武威八荒に振ふ　あゝ盛んなるかな実に島帝国は主義を以て盈たされ　自信を以て其欲くるなきを見る　故に曰くいたづらに主義の乏しきを慨くなかれと更に曰く　いたづらに主義あるをのぞむ勿れ　此言をなすもの敢て其煩瑣を厭ふ所以にあらず　其必要なきを知ればなり

日本主義何の栄光かある　世界主義何の栄光かある　畢竟人間はこれ迷へる羊の如きものゝみ　半生の小我見に無限の自然を私議せんとする何ぞそのあやまてるの甚だしきや　主張何者ぞ主義何者ぞ　島帝国近日の景状はこれ餓鬼亡者の横行しつゝある修羅場のみ

主義よ　自信よ　何ぞその名の美にして実の添はざる

彼等に焔々たる信仰の火の燃ゆるものあるや　主義の声や　これ遂に後進を過るものゝみ　彼等は自己の便利をはかるものゝみ　私利のみこれ営々として企つる俗人のみ

故に曰くいたづらに主義の乏しきを慨く勿れ　むしろ其多きを吊せずんばあらず　いたづらに其存在をのぞむ勿れ　寧ろ其存在を悲

んで可なり

寧ろ寧ろ主義の滅絶を企てざるべからず　僅々五十年の短生活　残すところ何者しかも若年の名を止めんことを希望す愚や遂に及ぶべからず

哲学者何者ぞ　理学者何者ぞ　彼等は無極の真理を透徹するの眼を有するか　其系統なるもの何の價値かある　大才に非んばしかく燎々たるものを得ずと云ふ勿れかと雖猶才ありと信ぜるか　愚かなことかな　其主義を捨てゝ大才につけ大才よ　其主義を棄てゝ無極と語れ敬虔の風地を拂って無信の徒いたづらに私利を営む天下の不利之れより甚だしきはあらず

哲学者と理学者が其私情の系統を擲ち詩人と教育者が其小我見を棄てざるに於ては世は長へに闇黒たらん也

借問す　百分の主義先生　足下等よく人生の眞價値を知り居るや　其解明を先にして然る後主義を建つるも敢て遅しとせざる也

いたづらに主義を望む勿れ　建つる勿れ　頭上に輝く無限の栄光を見ずや　人間の煩惱　須くこの辺より来るものならずんばあらず喝

露骨集　魚住梔花（第四十三回）

かゝる心が起った

此節は兎角自分から露骨になってしまって一向に平気な性分になった。自分はよい事と思って居る。陰険とは陰見と音通で自己の真価をいろいろとわからぬ様にすることだと誰やらが云ったが如何にも面白い見解である。自分も確か多少の陰見をしたのは事実であるが、何も悪意あっての上の事には無いにしろ、恐らくは不必要な事であったらうと思ふ。

自分が露骨になった（ママ）の事実だが、まだ絶対的露骨と云ふ程度までは進まぬが餘程露骨になったのは抑も二つの理由がある。第一は新約聖書約翰默示録を読んだ時に起ったもので其默示録に未来の審判によって硫黄の燃ゆる地獄の苦痛を与へらるゝ者の中に数へられ居るものに自己の信仰を憶して發表し得ぬ者も免れぬと書いてある。（默示録第廿一章第八部）。今自分は信仰を有して居ないから人情の羈絆につながれて時には良心を鞭韃し得ぬ事があるがそれは絶對者の後援を持たぬからの事であるので超人間力でなければ能はぬ事だ。然し自分は信仰を求めつゝある傍、勇気を鼓舞して可能的だけ人情の束縛をたちて意志を実行する習慣性を養はふと思った。これが自分をして今日あるやうに導ひたのである。今一つは自分の人生観の傾向の変化の産物でつくづくと考へるに人生程頼む

に足らぬものないと思はれるので（別稿『闇夜』参照）、此様な人間社界の毀譽何すれぞと云ふ感になってしまって周囲の事情には頗る無頓着になったからである。一朝自分が偉大なる宗教の後援を得た時は充分強い堅い深い広い大きい者となって全く超人的活動が出来るだらう其階段の入口として今日の修養上の一変化を喜ぶ。

忠告

自分は或人に忠告した。共究会会員で温厚な人で望みある人で賢い人である某君に忠告した。それは其人の性行が面白ろからぬ傾向であったから見兼ねたのだ。真率な気風は抜けて柔悠な真似をして喜ぶ風になったから慨嘆に堪ゑなかったのだ。高尚な趣味をはなれて野卑な獣的人間の仲間入して喜んで居るのが快くなかったからだ。

霊の修養を抛擲して肉の発達のみに走ったのを残念に思ったからだ。自分だとて肉の大切な事は知らんでもないが、肉を最重要な者であるとは思はない。彼の人の上に就ては多く議論すまい。たゞ簡単に云ふと墮落しつゝあるのを認めたのだ。だから病膏肓に入らぬに先ちて勇ましい決断力を振って其病根を杜絶する様に勧めた。少なからず其親しき交通の間柄の某某を挙げて攻撃して今の中に交を絶てよとまで云った。自分は彼の人が墮落の門から抜けて帰って美しい高尚な人間らしい者に爲り得ると見込をつけたからなのである。彼の人の天性は立派に高潔な者であったであらうと想像出来る位望みのある人であった。彼の人一人の改悛を得たらば大いに四辺に多くの影響を与へる事が出来ると勇んで悦んで彼の人を救ひ出さうと試みた。然し悲しい事には自分は彼の人とは餘りに懇意で無かったから便宜が悪くまらどんな誤解を招くやも知れぬと云ふ恐れから躊躇したが、さりとて前途頼母しい人を見す〳〵危険の位置に放任して置く気にもならないから奮発して筆を執った。人の上心配する自分ですらも前云った通り人情の弱点は爭はれぬものである。自分は彼の人の利益を図るに熱心ではあったが、又自分の迷惑を避けやうと思って名を匿して遣った。其忠告書が自分の手から出たと云ふことは彼人の充分知り得る様に書いて置いたが果して自分と云ふこと知ったらしかった。しかし悲しいかな彼の人の性行はます〳〵獣的に移って行くものだから第二回の警戒を加ゑて置いただ、さて追々と自分に勇気も生じ、修養の效果が顕れて来るに従ひ上記のやうな考となると同時に（約翰默示録を読みてより二時間後）二回の匿名書は自分の手から発せられたこと、自分の所思の幾分とを告げて自分の言に対して弁ずること若くは意志を示されん事を願ってやった。自分であることが明かになったと同時に彼の人はどんなに怒ったらう殆ど罵詈とも聞ゆる激語を以て非難し其親友の名を挙げて嘲罵したのは少くとも彼の人に悦しから

ぬ感を起させたであらう。遮莫、役人は一片半句の答弁をも寄せて来ぬ。自分は多くの人に就て自分の為したる事を告げて役人の近況を尋ねた所が皆同じ様な事を云った。彼の人が返書もよせずに居る道理も分ったので自分は大息彼人の前途に泣いた。自分は其誰なるかを語るはいと易いが、それは彼の人の迷惑となるのにならず、彼我共に一向に不利益であるから敢て云ふまい。たゞ此一扁は彼の人の眼に触れんことを切望するが恐らくは彼の人は共究会の文章に目を貸す程の時間を持って居るまい。噫々。

誤解と云ふものは相互に不利なものだから彼の人に誤解されても自分は有り難くなければ、また自分が偏見をも棄てたいから一度は是非逢って物語したいと思って居る。

手あたり次第

菊池君は限りある歴史の末を以て人間の行動の意義は滅するものであると云ふ論者であるのだが、自分にも其様に思はれぬでないが、宗教家の言に耳を貸すこともまた惜まない自分は此有限界が人生の終りと是認する日になったらば自刎して死ぬるのみであるが、菊池君は有限の此土に安心して生存する価値ありと云ふ。この点に於ては自分は菊池君の識見の浅薄軽浮なるを斥ける。

高井君のやうな人物をして沈黙を守らせる社界は悪むべきものである。自分は高井君が今一層勇健に人生の快楽に向って驀進せんことを望む。

宮崎傳治君[75]が近頃しきりと基督教研究を始めて居る。同君のやうに社会の缺陥がよく目に入る人には絶対者に依るに非ればたゆることが出来まい。自分は自分の親戚中からかゝる求光者を得たのを名誉と思ふと同時に世の酔生夢死の才子連に此幾分の一の心を起させたいと思ふ。又同君は共究会の現状に激して退会したいそうである。共究会の現況は如何か知らぬが、自分は去年の頃でも自分から人を強て入会を勧めたことはなかったが、まだ夢は依然と続て茶話会を唯一快楽と心得て居る様な蟻的人物が主動になって居るのか知らん。遮莫、自分は高井・真能二君を疑ふ程に遠望的絶望はして居らぬ。

新刊の書籍中「帝国主義」[76]は好著述であらうと思ふ。愛国心・崇王心など程ケチな賤しい根性は早く取り去らねば到底人類の幸福は増すものでない。

此節覆面して心を攻撃することが文壇で流行するが商人根性の最恥づべき醜を露出したものだ。與謝野鐵幹に對する中傷の如きは殆児戯に等しいけれどもいたづらの極下等なる悪い事である。

人物証などは大方つまらぬ物である。「新聲」に出て居るのなんかさっぱり話にならぬ。世教に益ないものは謹まねばならぬ事である。

兎角真面目に限るので厳として烈日の如く世評の外に卓立して意志を実行するのが男子のなすべきところだ。其成敗は関せぬ。圧制官吏の爲めに殺された佐倉宗（ママ）五郎は今猶人の心を支配して居ると云ってもよい。さすれば生きて居るので殺されて死なぬものである。一箇單刀衆怒の府に立って正義を号叫する内村鑑三先生はえらいものである。人間のする評言に男がビク〳〵してたまるものか。

共究会東京支部会に於て（第五十回）

支部会員　十三名

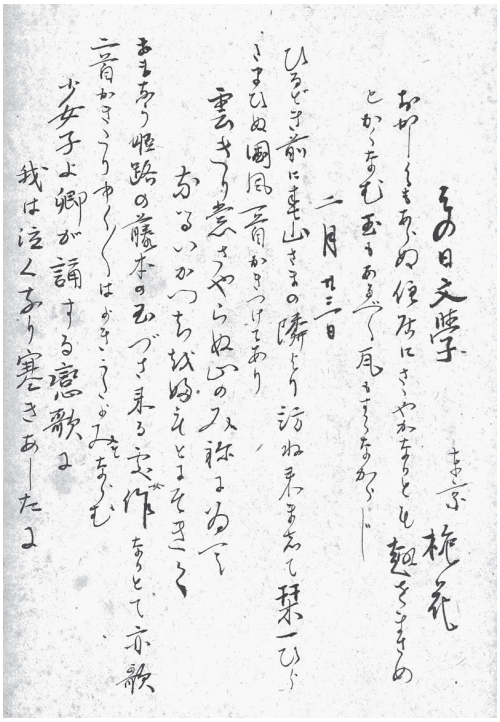
○思ひぞ出づるは幾年のむかしの彼の市河の清き流れ、廣峰の緑。我れ今茲に東の都牛込の高台に北小石川の高台を望んで旧友と会す。かくて忘れんとする記憶を蘇らしむるを得たり。白鷺城下の健児いま如何。願くは我がいま遥かの〈「なる」を訂〉西を思ひ出づるごとく、此文字を見たまへば、また東を思ひたまへ　魚住影雄

魚住の文章は、他に、四十三回の「その日文学」があるが、これは日記のようなもので、他の人の俳句などの引用も多い。『折蘆書簡集』の年譜で、明治三四年の、

三月十日、「東洋史を読み英雄興亡の跡を尋ねて只管に其甲斐なき児戯に類せるを思ひ、人生を価値なしと思ふ念盛ん」と記し、人生の疑義に苦しんで日記の筆を断つ。

とある日の直前である二月廿三日から三月九日までのものであるが、分量も多いこともあって、今回は掲載しないこととする。なお、二月二七日に、『新声』に載った「姫路の逸夢」を、「逸夢とは福田の君ならめ。五百にもあまる句を投じたまひたる、実に盛んなることにこそ。如何に君わが共究会の名だたる才人」とし、三月三日には「人の云ひけらく逸夢てふはわが福田のきみにはあらで、あだしびとな

りけるとぞ、いかに。」としている。第四十回の蘇冬青「冬青放語」に、「梔花あり、蘇江あり、逸夢あり」とあって、共究会内にも逸夢という人物が居たと思われるが、これは、高浜二郎の友人でもあった小林逸夢であろう。(77)



また、回覧雑誌ならではの評語もあるが、これも今回は掲載しない。

六　和辻哲郎の文章

和辻哲郎の文章は、全て第五十回に載るものである。第五十回の誌面は、東京在住の乙種会員の寄稿が目立つ。寄稿というよりも、東京で会合を行ったその記録が中心である。次の和辻哲郎の文章は、それをやや苦々しい思いで見ていることが伺えるものである。

「あき子」の署名で書かれているが、目次には「あき子（和辻）」とある。

天外の花園より　あき子

■たのしき〳〵われらがつどひは又夢のやうに成りは致さずや　心もとなく候。春の日の暖き山の遊びに皆々様を欺きたりとて犬など、罵られ候。嶋田様の嘲笑ひ給ふ御声まで遠き都よりひゞき参り候ひて誠にはづかしく候。これよりは神かけていつはりは申すまじく候。

■達様の御叱りも受け申候、御小言も聞き参らせ候　会長さまを尻にしきたりとて叱られ給ふをも目の当り見奉り候。この君　骨相博士になられ候へば　うかと帽被らずに頭を出し候はゞ　この人の頭は盗心発達したりなど、云はれ候べくや　尚々この君の海棠の美しき畫も見参らせ候

■源様ゆかりの色が御好の由に候。菫一鉢送り候はば御礼には叱度〈きっと？屹度？〉美しき画下さるべく候　画と云へばこの君の繪板（カンバス）下げて写生に出掛給ふありさまは実に……云ふまじく候　又、犬などと罵られ候ひては私困り入り候、されどこの様な時には菫（すみれ）の送物がきくべく候

■勇士鹿十郎様　このごろ菫が蝶と化（な）りし様に変られ候。丹羽様は怒らせ参らせむとて奔走して駄目に候　頭を撲り申しても悠々と春の風に嘯き居られ候

■呉々も熱心におなり下されたく候　共究会は生かせば働くべく候　堂々たる支部さへ東京に在ることに候へば。

■須様の哭声　このごろ聞え申さずとて天外の花園にては専ら取沙汰致し居り候、あまりに離れたるためにも候べきか

■俊様は私百度（も、）あまりも殺し参らせし人におはし候　幽霊の百人目の子孫に候　四代目の孫までは名知り居り候へど百代目の孫は何と云ふ名に候ふや　それにその名の解らぬ孫は幽霊の孫に候

■これにて筆擱き参らすべく候　終りにビスマル公はサンダーの弟子におはし候　ゲシマックの専売特許権持ち居られ候　このごろトランペットを買ってもらひ給ひて景気よきこと候

まづは

「嶋田様」は、共究会東京支部の様子を纏めている島田宏（注64）か。島田の文に、「老婆心ではありますが、どうか諸君　眞の共究会なるものを愛して何卒御熱心にやられん事を希望致します」とある。達様は黒坂達三（注2）か。須様は中須養三（注25）か。

九尺六尺小僧足下　哲郎

花に埋れ書に埋れて哲郎あり、眠の魔の襲ひに幾度か筆は細き〳〵径にさまよふて稿を更ゆること三度、時に?を呵して大に云ふあらむとす、されど私は決して足下の法名をつくり足下を英雄某々に比せむとするのではないので。

あゝ足下、炎の如き勢を以て大野心に猛進せむとする足下、私は実にその大野心に対して天を突ひて峙つ大巌の前の小さな〳〵草花なのであります。足下を群羊に向って将に一大吼の下に地に伏せしめむとする獅子王に比すれば私は優しい小羊等に取廻かれて空の雲の緑の小川に写るのを眺めやうと云ふので、洪々漠々たる大陸が足下の舞台ならば私は牧場の木影の牧童であります。あゝ、私は自分ながら己れが小さな弱いものであると悟り、獅子王の威厳と冠と権威（をごり）とは遂に求むべきでないと思ひて、日東の神国のためには到底要なき大和民族には不名誉なるべきものとなったのです。

足下がダリオス王を学んで大統一を企つる時、私は極端に自由を迎へて、宇宙の最小分子たる一城塞（じやうさい）＝小さなホームに寄って孤り赤旗を掲げます。悠々たる大宇宙の神秘を探り得ずして煩悶（はんもん）する青年は我小共和国の友人たるものです

哀れなうき世に偈（おご）りたかぶる輩は我等の敵です、吾曹は時の変異に従って次第に自然に大となりゆき、死に至って其極点に達するので、哀れな人々は死に対して思慮なきアダムイーヴの行を永久にうらみ悲むけれど、吾曹は超然と現実を離れて霊を信ずるのであります。

美しい自然は吾曹を神の子に為（し）てくれました。荘厳なる自然は吾曹の心から浮薄な行の原（もと）となるべきものを悉く洗ひ去ります。清き自然大なる自然は廣く〳〵高く高き吾曹の霊を容れ、吾曹の空想をゆるします。吾曹の霊は花の精と交り蝶と戯れ、あらゆる楽しい所を訪れ廻ります。なつかしき友なる自然を吾小共和国は有するでせう。私は今その共和国の基礎を造りつゝ、自然に慰められつゝあるのです。

自然の最も若き時代、人にたとへて華やかな少年の時代たる者は緑と残紅と蝶とを片身（かたみ）として遠く〳〵無窮の空に消えてゆかふとし

ます。私の友は漸く老いむとするのです。あゝ春を送るの詩、春を送るの詩、私は鶯に頼んでその歌を歌はせやうとしたけれど彼は断（ことは）りました彼は泣いてゐた人です。蝶にその舞を舞はせやうとすると彼は香はしい追懐の話を致して決して舞ひませんかった。あゝ春を送るのは実に悲しいものです。私も無限の悲哀を覚え、なつかしき華やかな人の去るのをこの上もなく淋しく感じます。

あゝ足下、私は今若い霊の友に別れて幾分か理性の色の交った壮年〈原文「莊年」〉の友を迎へやうとします。私は右の様に固く冷かに、花の様に柔く不潔な社會に向って千古変るなき謌（あは）れみを垂るゝこの友達の情がどんなに嬉しいでせう。汚れた世はその悪魔の様な手を延べて清いものを悉く汚さねば止まぬのであります、その悪魔の甘いさゝやきによって人々はドシ〳〵と獣に近く引き戻さるゝのです。神の子の様であったハートに立つべきキューピットの白羽の矢は、恐ろしい、蛇の様な形の魔の子の離った毒矢に代られて、而も人はその魔の矢を恋の神の神聖な矢と思ってゐるので、霊と肉とは相離れずに並行すべきを、あゝ多くの少年、有為の少年、美に憧れ様とする少年は肉の奴隷となるのであります、それで霊を無視し清き征矢（そや）を見止めぬ、恐ろしい秘密てふものに隠れて汚を覆ひ怡として、而も清き美を攻むるのです。つまり小さな悪魔となり終ってしまいます。

あゝ小（ちい）さな悪魔、霊の自由を束縛しやうとするものよ、われらが思想を束縛せむとするものよ、汝は大なる神の命を持って而かもそれを果さねばならぬのである、汝は「人」を誤解したもので従って世を曲解し美を知らない、哀れなるものよ、悟れ、哀れなるものよ。実（げ）に魔のために恋は覆はれて汚されたのです、人が微妙なる性、感情の最も高潮に達するのはこれで花が語り取が慰めるのもこれ、宇宙を窮はふとし、世の汚れを悟るのもこれであります。而もピュアーなるそれがあゝ覆はれて居るのであります。

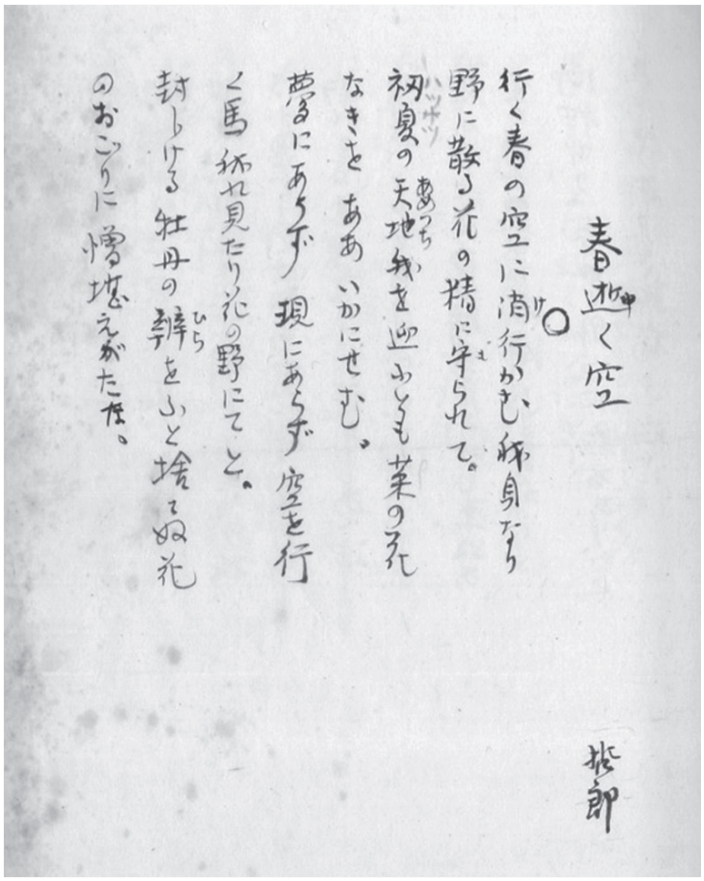
「美」を感ずるのが楽の基となり、楽が人生の大部を解釋します。美は霊の美であります。精霊が高翔し逍遥し奔流の如く、白雲の如く、春潮の香、暮雲の彩、それに美を見るのであります。

あゝわがたましひは胡蝶の様に飛び廻ります。多くのたましひが縛られて自由を失ひ　はた迷ふて中宇にさまよふのが　いかに哀れでせう。

あゝわがたましひは恋します、若き血は肉に漲って微かに振ふてゐます、泥に沈んだ人のたましひは、魔に支配さるゝたましひはいかに哀れでせう。

春逝く空　哲郎

行く春の空に消行かむ我身なり
野に散る花の精に守られて
初夏の天地我を迎ふとも菜の花
なきを　ああいかにせむ。
夢にあらず現にあらず空を行
く馬我れ見たり花の野にて　と。
封じける牡丹の辨をふと捨てぬ花
のおごりに憎堪えがたな。
魔の手ありて人の七人罪にしぬ　さは
れ醒めしは只只一人。
世を忘れ　守れ花園を　百花の枯
るが憂しとはおぞや花守（達兄に）
行く春を送くるに詩なし　あゝ神
よ閔へよとての御心もてか
砲のひゞき悪魔の声と叫び来ぬ　あ
ゝ声魔の香に我碎ふものか。
御神あり。春ゆく野辺に黙示あり。足
らむや淋しき孤獨を泣くに。
胡蝶ありて無窮の空に憧るを我
影に似るとは好く云ひ得たり。



美の霊の宮居にたどりたどり行くを
路のいばらのなど徂み得む。
人の世をよしと見て取る「美」の路をたどる
に君よ仇花折るな。（人に）
鳥が音を伶人の楽にまされりと聞け
りし杜を小川は廻る。
詩人われこゝに世をなき世を怒り
愛す花は色あせてゆく。
澄む空を、かの日の空と見る時よ　濃
き春霞我れを包みぬ
蒼穹（おほぞら）に浮て淡き雲に我が魂（たま）を
乗すれば菜の香傳（つたひく）ひ来
絵筆とれど色は活きずて美は成
らず　如かず我が畫を神の前にさかむ。
観音の像に笑（えみ）ありき。玉手坂、其日
よ霞は紫なりき。
ちぬの浦　波白かりき　青かりき　松の
枝振尚も心に

○

麦笛の音（ね）かすれゆきぬ　菜の花に
埋（う）もれし身の辺（へ）　蝶廻（めぐ）り来ぬ。

菜の花は飯駒につゞく畷道　正行

が血の名残か蓮華、
長閑なる波のうねりに新潮の香高
き坂が隱家の朝。
もろかりし古城の堅め石垣の名残
の陰に赤き花散る。

○

我たゞ獨り森に入り、花求むれど影はなし
折しも陰に星の如。一枝の花は輝きぬ。
露食む目と美しく。
手折らむとすれば花の云ふ――
あゝ君よ、しほれむために手折らるか、――
根のまゝ我は堀り取りて、花の園へと我家に。
かくて靜けき園に植えぬ、新に今は蘇へり
花永久に開くなり。

（ゲーテより）

七　おわりに

以上、甚だ纏まらない紹介になってしまった。いずれ、曾根博義ほか（2004-5）のように、全体を紹介したいという思いもあるが、どのような形でそれを行うのがよいのかについては、なお考えねばならない。著作権の保護期間の満了した人物の文章については、画像電

子化してｗｅｂ上に公開することも考えている。

魚住影雄らの、いわゆる教養主義的な学生生活のありかた[78]と、本誌のような回覧雑誌は密接な関係があるし、投稿雑誌の類との関係も見ておかねばならないが[79]、ここには略す。

参考文献

青木文美（2002）「《新資料紹介》回覧雑誌「椶梠（櫚）」」『愛知淑徳大学国語国文』25

明石利代（1975）『関西文壇の形成――明治・大正期の歌誌を中心に――』前田書店出版部

勝部真長（1987）『青春の和辻哲郎』中公新書

河盛好蔵（2000）「新発見　青い扉Ⅱ　三高時代の回覧雑誌原稿・20枚」『新潮』97-6

木股知史（2009）『回覧雑誌『密室』解説』甲南大学木股研究室（神戸）。

紅野敏郎（1962）「回覧雑誌『麦』批評集の一面」『文学』33-3

小谷信行（1998）「回覧雑誌『無声』について」『鈴鹿工業高等専門学校紀要』31

助川徳是（1983）『啄木と折蘆――「時代閉塞の現状」をめぐって』洋々社

関口昌男（1977）「中学時代の中村憲吉――植松涙仙と回覧雑誌「白帆」を中心として――」『語文』（日大）43

曾根博義（2001）「回覧雑誌『夕づゝ』の出現――百年前の一高の文学青年たち」『明治文学の雅と俗』

曾根博義ほか（2004-5）『翻刻・註釈・解題『夕づゝ』』第3号・第4号　日本大学大学院文学研究科曾根博義研究室

曾根博義（2011）「犬も歩けば近代文学資料探索（13）回覧雑誌『榎』」『日本古書通信』76-1

大悟法利雄（1970）「回覧雑誌「創作」と「創作文庫」――「潮音」時代の牧水」『短歌研究』27-9

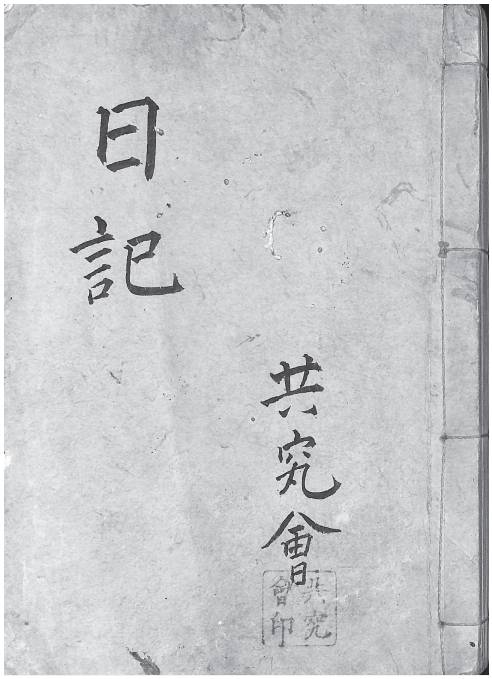
竹内　洋（1999）『日本の近代12学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社

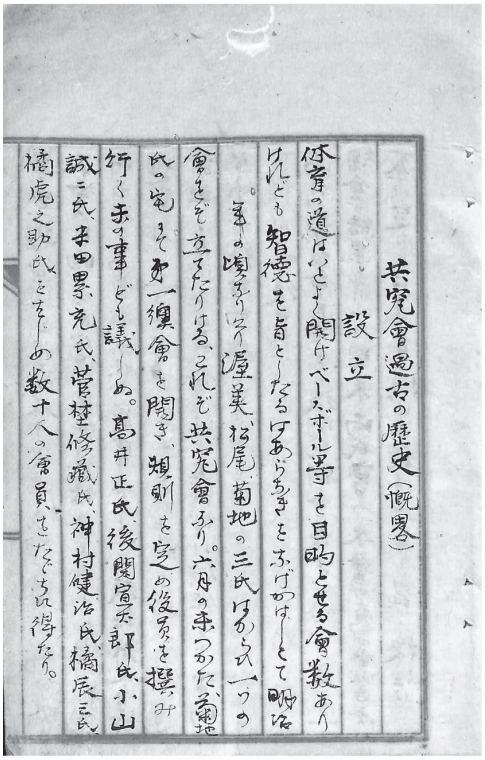
新関岳雄（1969）『光と影――ある阿部次郎伝』三省堂

橋本政次（1964）『近代播磨文学史　鷺城文壇を中心とした』姫路文学館　１９９６　増補新版

舩城俊太郎（2002）「出現した、百年前の地方文学の作品群――その経緯と、まずは詩文集『兵窓漫筆』・回覧雑誌『深山の花　臨時増刊』および『愛菫遺稿』について」『新潟大学人文科學研究』108

ロバート・キャンベル（2004）「回覧雑誌の時代」（『パリ１９００年・日本人留学生の交遊　『パンテオン会雑誌』資料と研究』ブリュッケ　２００４）





共究會過去の歴史（概畧）

設立

体育の道はいとゝ関けべゝ学問を目的とする會数ありけれども智德を旨とゝたるものあらざるをなげかはゝとて明治

年の頃より渥美、杉尾、菊地の三氏はかゝる一つの會をぞ立てたりける。これぞ共究會なり。六月の末つかた菊地氏の宅にて第一集會を開き、規則を定め役員を撰み行く末の事ども議りぬ。高井正氏後閑寛吉郎氏小山誠二氏、吉田累充氏、菅埜修藏氏、神村健治氏、橘辰三氏、橘虎之助氏などゝの数十人の會員となりぬ。

注

（1）三高、明治38年医卒。昭和29年名簿で故人。

（2）勝部真長（1987）p.101。芦田恵之助『恵雨自伝』、和辻哲郎「芦田先生の思ひ出」（『回想の芦田恵之助』）、和辻哲郎『自伝の試み』、和辻哲郎1912.5.8高瀬照子宛書簡。

（3）黒坂禎次とも。三高、明治37年文科卒（鈴木三重吉と同期で、共に『嶽水会雑誌』の編集委員（同誌25号など参照。一学年下の宮地直一も）で、稿も多し。福間甲松（注30）は同年の法科、宿南昌吉は同年の医科卒）。浪速高校教授なりしが、昭和五年没。

（4）会の本部も、姫路中学内ではなく、妙円寺であった。妙円寺は現在も姫路市内にあるが、会員のだれかがこの寺の人であったのか、などの事情については未調査である。

（5）菅野香蘭「思ひ出し草」（四十号所収）。折蘆年譜に「学生の腐敗を論じ、これに処する自己の現在と自己の思想の変遷史を説いて前波仲尾先生に呈する」と見える人物でもある。納富半三 編『前波校長と教師たち』三養基高等学校同窓会　１９８８。『菊池庫郎全歌集』、高浜二郎『続湯島竹枝』も参照。

（6）たとえば魚住は「迎・抑・仰」の旁を、中学時代は常に「卯」に作っている（迎は和辻も同様）し、「成蹟・実蹟」「成效」（一方で「功能」）なども目につく。

（7）野村精一（1972）「藤岡東圃の初期（二）――『我尊会文集』に就て」（「山梨大学教育学部研究報告」第二十二号）。『西田幾多郎全集』（2005）第十一巻。上田正行（2008）「翻刻『我尊会文集　第一（藤岡作太郎）』（「金沢大学文学部論集　言語・文学篇」第二十八号）、上田正行（2009）同続編（「金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇」第一号）、上田正行（2010）「『我尊会文集』に見る若き日の藤岡東圃」（『国学院雑誌』111-2）。木越治編（2012）『藤岡作太郎日記』。

（8）小谷信行（1998）は、高浜虚子らの三高における明治二十年代のもの。舩城俊太郎（2002）は、明治三十年代のもの。青木文美（2002）の「棕梠」は、与田準一等による昭和初期のもの。紅野敏郎（1962）「回覧雑誌『麦』批評集の一面」は、明治四十年代の白樺派のもの。大悟法利雄（1970）は若山牧水周辺の大正初期のもの。河盛好蔵「青い扉Ⅱ」は、大正十一年の三高での回覧雑誌「若葉のかげ」からのもの。関口昌男（1977）は、明治三十年代の広島県三次中学校のもの。曾根博義（2011）は、大正13年の臼井吉見らのもの。木股知史（2009など）。また、

地域に残る明治末から大正にかけての回覧雑誌を翻刻した『明治・大正の回覧雑誌　双葉集』（安城市）新田小学校ＰＴＡ歴史クラブ、1985のような試みもある。第一集のみ実見したが、安城市立図書館に第三集まで収められているようである（同館ＯＰＡＣによる）。『阪急古書のまち２００７初夏』p.93に、萬字屋書店出品の「回覧雑誌「向日葵」　京都商業学校文芸同人誌　毛筆・ペン書草稿　創刊（明治42年10月）～終刊（14号　明治44年5冊）内9号欠　別冊1冊付　14冊　３５０，０００円」というのが載っている。回覧雑誌が、回覧後、常に綴じを解かれるわけではなく、この共究会文章会が、殊更に珍しいわけではないだろうことを注記しておく。

（9）『第四十四回文章会』の冒頭にも貼り込まれている。

（10）姫中第十回卒。渥美育郎。筆号、渥美桂崖・咲蘭坊。大阪商船勤務。一九六三年歿。『姫路市史』第12巻p.790

（11）松尾姓は渥美育郎と同期に二名。菊池と同期にはなし。後に退会していることもあり、不詳。

（12）第十一回卒、菊池金次郎。『菊池庫郎全歌集』所収の年譜に「明治三十三年（一九〇〇年）十九才　三月、姫路中学校卒業。在学中共究会を結成して渥美育郎、長沢一夫等と交遊。」とあり。早稲田大学予科・東京高等商業予科を経て早稲田大学部商科に入り明治四十年卒（第一期）。甲府商業学校を経て、関西甲種商業学校勤務。小林天眠『毛布五十年』所収の天眠あて書簡に、共究会時代に言及。筆号、菊池香雲。一九六四年歿。

（13）第八回。高井粛夫（注63）の兄。昭和九年没（『姫路中学校々友会々報』98号）。

（14）第八回。『菊池庫郎全歌集』によれば、菊池の従兄で近松秋江の友人。早稲田大学文学科、明治三十四年卒。「私と一緒に早稲田の文科を出た人に、今は大阪に居る後閑宣太郎君といふのがあって」（『早稲田文学』M40.3.1「無題録〈1〉」『近松秋江全集』第九巻による。p.71）。正宗白鳥とも同期。「それともう一人、これは早く亡くなったけれども後閑といふ人」（『正宗白鳥全集』第三十巻p.85「文藝雑談」）。明治三十四年四月二十二日の「月曜文学」は、「秋江生・白鳥子・五葉庵・山水子・星月夜」の五人の発言がある（ヨミダス歴史館の「明治・大正・昭和の読売新聞記事画面」による。第一七回の月曜文学まで「山水子」のあることを確認。『文章会』31回（明治32.5）の長澤蓼水「ゐぬころ日記」に「在東都山水子」とみえ、早稲田文学についてのことなどが書いてあることから、山水子が後藤宣太郎であろうことが推察される。なお、読売月曜會の写真が様々な書籍に載せられるが、「宜太郎」と誤植されることもある（『早稲田と文学の一世紀』p.54など。）筆号、後閑柳剛。関西大学創立五十年式典（昭和十一年五月二日）の際に慰霊祭のあった物故学員の一人として名が上がる（関西甲種商業教諭）。『関西大学百年

史　資料編』平成８　p.541。

（15）第九回に「小山誠次」あり。

（16）第十回。「米田累允」と、後の名簿は作る。

（17）第十回。東京高商を出て徳島商業学校の校長をした後、小倉製紙・王子製紙・北海水力電気などに勤める。筆号、菅野香蘭。

（18）第十回に「神村健次」あり。

（19）第十回。

（20）第十一回に「橘寅之助」あり。

（21）第九回　浦上正二。

（22）第十回　小泉武三。

（23）第十一回　吉田直毅。文章委員。明治四十二年没。

（24）第十一回、長澤一夫。第六高等学校　大学予科第一回卒業（明治36.6.30）　天宅敬吉（注28）と同期。明治41年　東京帝国大学法科大学卒業。三井鉱山に就職。魚住影雄（『折蘆書簡集』には、長澤宛の書簡は収録されていないが、長澤への言及は随所にある。）のほか、阿部次郎（『阿部次郎全集』日記の明治四十年以降、書簡では、長澤宛のものも明治四十年・四十一年に集中してあり、以後も、宿南昌吉宛・依田定尾宛・宿南八重子宛（昭和九年頃の『宿南昌吉遺稿』の編纂の頃、また昭和二十六年の１１７９、１１８２）などに名前が見える。）・宿南昌吉（『宿南昌吉遺稿』昭和版は編纂に関わり、中にもしばしば言及がある。）などと交流。『文庫』に四篇、文章が掲載されている（不二出版の２００６年復刻版に執筆者索引あり。「姫路　蓼水」「姫路　長澤蓼水」など）。のち、雑誌等に実業関係の文章があるが、三井鉱山関係で坂本星堂（1940）『鉱塵抄』に序を寄せている。一九六五年歿。新関岳雄（1969）第七章「親友」参照。『菊池庫郎全歌集』p.11　橋本（1964）、『姫路市史』第12巻、明石（1975）。

（25）第十二回、中須養三。東京高商、明治三八年卒。三井物産。

（26）不詳。

（27）魚住正継。影雄の兄。一九五九年歿。助川（1983）

（28）第十一回、天宅（あまのや）敬吉。第六高等学校　大学予科第一回卒業（明治36.6.30）　長澤一夫（注24）と同期。明治40年、東京帝国大学卒業、文官高等試験に通り、大蔵省（造幣局長）など。鈴木三重吉の浦瀬白雨あて書簡（1936.2.22『鈴木三重吉全集』（1938）第五巻p.689。No.1075）によれば、同月逝去（浦瀬白雨（七太郎）は六高の一級下。）。三重吉書簡No.1100（同年4.23）は、神戸の未亡人邦子宛、本の礼状。追悼歌集の天宅邦子『亡きみたまに捧ぐ』が送られたものであろう。助川（1983）には、号「浩々々」とある。

（29）第十二回、砂川隆雄。筆号、火の子散人。国学者砂川雄健の子（『千年の蔭』明治41年刊を参照）。

（30）第十二回、福間甲松。三高、明治37年法卒。筆号、福間狂海。助川（1983）には、「狂田」と。大正十年没。

（31）同姓おおし。

（32）第十一回、武村武二。東京高商　明治37年卒業　菅野修蔵（注17）・樋口愛之助と同期。第百銀行へ。

（33）不詳。

（34）第九回、小疇（こはぜ）寿。小疇寿夫。

（35）平塚望。名簿第十二回に「平尾望」とあるが、昭和十三年版会員名簿では「平塚望」とあり。

（36）「習字科体操科教員免許　習字・体操作文　助教諭兼舎監　佐々木弘　埼玉県士族」（『姫中・姫路西高百年史』p.70）

（37）金峯允文　在籍はM30.4-31.9　教諭　漢文。

（38）不詳。

（39）「高等師範学校卒業　英語・数学歴史　同（教諭）　遣沢恒猪　高知県士族」（『姫中・姫路西高百年史』p.70）。和辻哲郎「自叙伝の試み」にも言及がある深澤由次郎かとも思われたが、在籍は明治34.11-42.12（後に第五高等学校・早稲田大学へ。後に『応用英文解釈法』などの著書あり。）

（40）第十一回、阿山猪佐久。大正十二年没。

（41）第十二回、小田芳三郎。助川に「精寂」の号。

（42）第十四回、入江三郎か。

（43）同姓、複数人あり。

（44）不詳。

（45）不詳。
（46）不詳。
（47）不詳。
（48）不詳。
（49）第十四回、吉川精一か。
（50）不詳。
（51）第十一回、八木利一郎か。
（52）不詳。
（53）第八回、細野幸次郎ではないと思われ、不詳。
（54）第十二回、水澤長太郎。明治四十年没。
（55）第十二回、前田秀幸。筆名蘇白・秋皎・ふみ男。『秋皎随筆』1931、蓼の芽社。橋本（1964）。また、高浜二郎『続湯島竹枝』p.61に言及あり。
（56）不詳。
（57）第十二回。
（58）第十二回。
（59）第十二回。
（60）第十二回、亀田寅吉。昭和九年没。
（61）第十二回、西田信司。
（62）第十二回、高見新太郎。大正八年没。
（63）第十三回。明治三十九年　早稲田大学高等師範部歴史地理科卒。栗田肅夫。のち、姫路西高校校長。高井正（注13）の弟。
（64）高浜二郎。『兵庫県近代文学事典』（和泉書院）では、「高浜二郎」の項（佐藤淳執筆）と「高浜天我」の項（木村一信執筆）とに割れるが同一人物。一九六六年歿。姫路中学は中退。雑誌を含め私家版を多く出しているが、これらは、国文学研究資料館・関西大学に多く収まる。また、

栃木県立図書館に蒲生君平関係の稿本が収められている。橋本（1964）。中野三敏『本道楽』講談社。第四十回の投稿者に「高濱江の蘇君」とあるのが見える。

（65）第十五回。東京高商、明治四一年卒。

（66）「谿山？史」の上に貼紙して。

（67）砂川隆雄。注29

（68）後閑宣太郎。注14

（69）「山紫水明」「光風霽月」などの用語は、『少年文壇』と同様である。

（70）年譜に依れば、明治三三年一〇月三日に入寮。

（71）前田秀幸。注55

（72）菊池金次郎。注12

（73）長澤一夫。注24

（74）天宅敬吉。注28

（75）前出。卒業時未詳。号、美水・故村。この頃、談話委員、のち会長。

（76）幸徳秋水著。

（77）高浜翠嵐（1963）『愛厳しく』pp.14-18参照。橋本政次（1964）も。

（78）竹内洋（1999）など。

（79）注24に書いたように、多くの会員は投稿雑誌への投稿を行っていたようである。

後記　姫路中学・姫路西高校の同窓会名簿は、姫路市立図書館蔵のものを見たが、いずれも戦後のものであり、故人の名については誤植も少なくないように思われた。また、姫路西高校出身の石原のり子さん（明石高専）には、資料の閲覧などで、大変お世話になりました。

Circular Magazine "Kyōkyūkai Bunshōkai" in Meiji Era

Akihiro OKAJIMA

Around 1900, there is a circular magazine made by students and alumni of Himeji Junior High School.

This paper introduces the circular magazine which Tetsurō Watsuji and Setsuro Uozumi participated in.